



## 第四幕

### 第四幕第一場

#### 《タイタン海軍「サンダーボルト」艦長日誌》

現地時間七月二日二〇一八時、当艦サンダーボルトは明日に予定されている船団発進に備えて最終点検に入った。本官は、国連軍総司令部で行われる安全保障理事会の最終ブリーフィングに出席するため、エゴ（人格）データ転送通信にて月に向かう。船団護衛を取りやめて大攻勢に打って出るという、突如提出された案の審議に参加するためだ。

なお空港における治安任務に協力してくれた民間人二名は、その際の負傷を治療すべく、やむなく当艦で保護した。収容スペース上望ましくないが、容態が芳しくないため、しばらく留まることになるだろう。

（サンダーボルトの延々と続く回廊。エレベータのような乗り物から降りたイム、カレン、孫。回廊には軍服を着た人々が忙しそうに行き交う。ある者は歩き、別の者は中空を浮遊しながら。イムは先頭を歩いて後続の二人を案内する。三人は韓国語、日本語、漢語を交え、歩きながら話している。カレンと孫の耳には白いイヤホンが付いている）

イム ……それでここが第八デッキであります。一三一、〇七二総トン数の当艦でちょうど中央に当たりまして、装甲と水素燃料タンクとに防護された当区画は……\*1。

孫 何だかこのブーツ歩きにきィなあ。足ペタペタするしよウ。

カレン こら孫君、文句言わない。副長さんに失礼でしょ。

イム 構いませんよ。（とカレンに向かって）磁気ブーツは慣れるまで歩みにくいものである。私もそうであったが、しばらく無重力環境で暮らせば自然と歩き方が分かってくるであろう。ところで腹はもう満足であるかね？（と孫に向かって）

孫 うん、たらふく食った。チキンサンドとミルク、ウマかったぜ。サンキュー。

カレン ええ、本当に美味しかったですよ、副長さん。あのキムチ魚肉ソーセージというのは初めて頂きましたけど、あれがタイタン料理なんですか？

イム いえいえ、当艦の傑作オリジナルメニューでありまして。ちなみに食堂はA I管理のバイキング式ですので、次回からは御好みの御注文をどうぞ。

孫 ラッキー！……ゲェープ（と大きなゲップを放つ）

カレン もう孫君ってば！ 落ち着いて食べなさいって言ったでしょう。

イム まあまあ、食欲と元気があるのはいいことであります。

カレン でもあんまりご馳走になって、ご迷惑でなければいいんですけど。失礼ですけど食べ物、いくらでもお有りになるというわけではないんでしょう？

イム どうぞご安心を。当艦の食品は大半がリサイクル・システムと合成機で賄われ

\*1 EP 世界の軍用宇宙船に比類する現代の乗り物は、その密閉性やハイテク化等を鑑みると、おそらく軍用の潜水艦だと考えられる。現代の軍艦において「新しいセンサーや機器は、それを扱うオペレーターに大変な精神集中を要求するようになった。それゆえ、乗員にも快適で暖かく、清潔にして静かな環境を確保してやる必要がある。清潔ということが、まず基本的に必要である。長い経験から言えるが、汚ない艦というものは、まず例外なく、他にも何か欠陥を持っているものだ」。リチャード・コンプトン=ホール、江畑謙介訳『潜水艦対潜水艦』（光文社、1988年）p.188。



ていますので、問題ありません。(ここから小声になって) 尾籠な話ではありますが、  
老廃物ろうはいぶつや何やらの再利用は宇宙生活しゆくめいの宿命かくごということで、御覚悟を。

カレン それはもう。(と微笑み)

(とそこで、通路の反対側から軍服を着た別の者〔エンジニア〕登場)

エンジニア ああ、いたいた。副長。ちょっと話いいですか？

イム うん？ なんだ、急用であるか？

エンジニア ええ、まあ。申請してた例の件で、ちょっとねえ。

イム そうか、ちょっと待ってくれ。(と孫とカレンに向かって) 失礼ながら、一分ほどお待ち  
ちいただけませんか？ 部下と話があるのですよ。

孫&カレン いいぜ。どうぞ。

(孫とカレン、退場。舞台にはイムとエンジニアのみ)

イム さて貴官ら労働組合の要求に関して、艦長ともども慎重に検討した。

エンジニア で？

イム 却下きやつかである。すまんな、少佐しょうさ。

エンジニア そんな無茶な！ この前の団交だんこうじゃあ、善処ぜんしよするって話になったでしょうが。

イム 当艦は宇宙船であってビア樽びんではない。これが結論である。

エンジニア ただのビールに大げさな！ ホラ、あんたの故郷の、ええと、マ、マ……。

イム マッコリであるかな。

エンジニア そうそう、それですよ。労働組合の代表として言わせてもらいやすがね。そ  
んなアルコール分五%の健康ジュースなら、食堂で出してかまわんでしょ。ノ  
ンアルコールみたいなもんだ。なあに、ブツは揃そろってましてね……。

イム ノンアルコールのジュースで我慢がまんしたまえ。節制せつせいは良いものであるよ。

エンジニア なあ、副長。組合の要求が却下きやつかされた場合の事前通告、お忘れじゃあないでし  
ょうな？

イム 安心したまえ。私は脳軟化症のうなんかしやうを患わずらってはいない。

エンジニア なら、この件、もうアルサンから許認きよにんもらってるんで、三〇時間後には組合一  
同ストに入りやすぜ。艦長宛かんちやうあてに伝言、お願いしやしたよ。

イム 了解である。だが引き際は心得しんこくしておきたまえ、少佐しょうさ。なにしろあの人は頑固がんこ  
であるからなあ。(とニヤリ) 操艦そうかんも何もかも、一人でやると言い出しかねん。

エンジニア ちげえねえ、なにせアイアン・ダンだからねえ。(と笑う) ところで副長。次  
の上映会どうすんで。飛行甲板はもう予約済みなんですよ？

イム アルコールの次は映画の話か。当艦はいつ豪華客船ごうかきやくせんになったのであるかな？

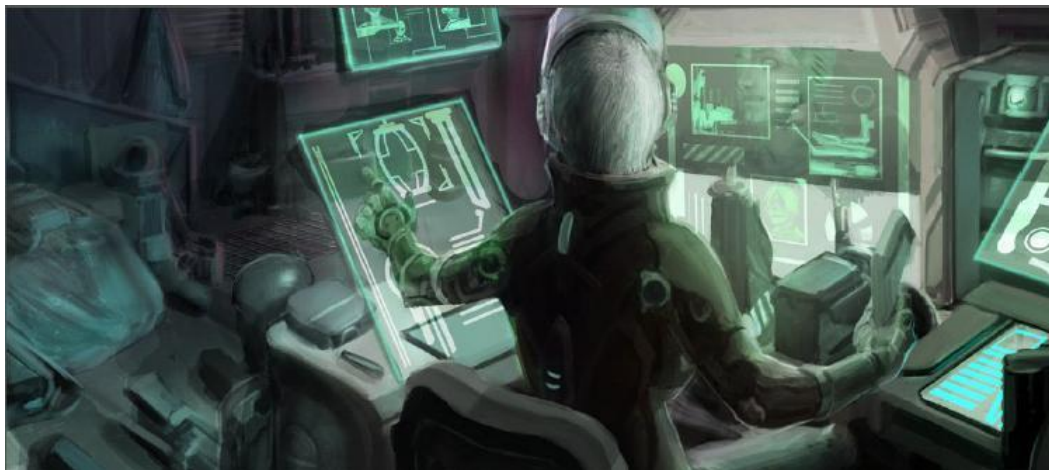
エンジニア 確かにこのお嬢は軍艦じやうですがね。(と壁を軽く叩き) 別に延期えんきだっていいですよ。

イム いや、予定通り来週開こうではないか。いい作品がある。傑作けっさくであるよ。

エンジニア へえ～、お前さんがそこまで言うとはねえ。ちなみに題名は？

イム 有名な古典である。「プルガサリ」という。怪獣映画かいじゆうえいがであるよ。

エンジニア ふーん、初耳はつみみだなあ。じゃあ次回、それ頼みやしたよ。(と敬礼)



(This image is quoted from *Eclipse Phase Rulebook 3rd Edition* (Posthuman Studios LLC., 2011), p.245)

<http://eclipsephase.com/releases>

(エンジニア、退場。孫とカレン、戻ってくる)

イム さて、ところで何か質問はあるかね？ (と孫に向かって)

孫 なあ、あんた、この軍艦乗って長いのか？

カレン ちょっと、失礼な呼び方しないの！ ごめんなさい。この子、悪気はないんです。

孫 なんだよ、もう。俺、こどもじゃねえよ。カレン。

カレン そういう口の利き方がこどもなのよ。

イム いえいえ、お気になさらず。(とカレンに向かって) ところで君がこのサンダーポルトのことで訊ねているのなら二年前の竣工<sup>しゅんこう</sup>以来である。軍籍<sup>ぐんせき</sup>の年数でいえば、警備隊<sup>けいびたい</sup>の時分から数えると三四年になる。(と孫に向かって)

カレン そんなに長くお勤めでも……でも、あの失礼ですけど、お若く見えますわ。

イム 事故で一度身体を換えましてね。肉体年齢でいえば四〇歳でありますよ。

カレン あの、すいません。変なこと聞いてしまって。

孫 へえっ、じゃあ、あんた生まれ変わったってわけだ。すごえなあ。

イム ふむ、文学的表現をするなら、そうなるかな。

孫 でもさ、なんでサイボーグにしなかったんだよ。アニメみたいなレーザー砲とか付けてさ。

カレン 孫君っ！ 人のプライバシーには立ち入らないのっ。大人のマナーよ。

孫 へえへえ、カレン<sup>ラオシ</sup>老師ィ〜。

イム まあまあ、別に構いませんよ。(とカレンに向かって) ところで君の質問だがね、第一に機械の身体は保安上<sup>ほあんじょう</sup>必ずしも歓迎されない。第二には私個人<sup>しんこう</sup>の信仰のせいでもある。(と孫に向かって)

孫&カレン 保安？ 信仰？

イム そう。第一の点を言えば、なるほど機械の身体や下位A I (seed AI) は便利である。飲食しない。失礼<sup>はいせつ</sup>、排泄もしない。現役の戦闘艦は多くが今でもA I制御<sup>せいぎょ</sup>、ごく狭い居住区画しか持たないタイプである。また生体 (Biomorph) の乗るスペースを撤廃して装備を強化した結果、カタログ上の性能<sup>せいよう</sup>は飛躍<sup>ひやくてき</sup>的に向上した。



カレン でも……この船、窮屈ではないですね。客船ほどじゃないですけど。

イム その通りであります。乗員の定数は三〇〇名でありますから。生体マシンと非生体マシンとの相互補完、そこが我らタイタン海軍なりのRMA（Revolution in Military Affairs）でありまして\*2。だからこそ対ティターンズ戦では、いまだ電腦制御に固執する他国の軍艦に比べ、我がタイタン海軍は優位にあるのですよ。

孫 う～ん？ それっておかしいじゃねえか。だってさっきのあんたの、ええと、副長さんのリクツだとさ、人間乗るスペース増えれば、性能落ちるんだろ？

イム そうであるとも、君。カタログデータ上はな。

カレン 何か別の要素があるんですね、数値には出ないような？

イム その通り。インテリジェンス・セキュリティつまり情報戦の要素であります。

カレン それっていったい？

孫 えーと、わかった。クラッキングだろ！

孫 ご明察。あまりに非生体的な電腦は、非物理攻撃つまりデジタル・クラッキングに脆弱なのである。セキュリティホールを防御しようと守備に専念すればするほど、本来の持ち味であった情報処理力が損なわれてしまう。対して生体は処理スピードこそ劣るが、クラッキングへの抵抗、突発事態における柔軟性に長けている。従って宇宙時代の戦闘部隊は、生体と非生体とが有機的に連携できる編制であるのが望ましい\*3。アミノ酸ベースのユニットであるヒト、シリコンベースのユニットである電腦A I、それぞれが互いを補完するのである。

孫 じゃあさ、この戦艦もA I 積んでるのか？

イム もちろんであるよ。海軍では古式ゆかしくコンピュータと呼ぶがね。

孫 じゃあじゃあ、そいつと話とか出来るのか？

イム それは出来ない。当艦のAGIにはバーバル・コミュニケーション機能が組み込まれていない。その機能はもっぱら生体ユニットつまり我らヒトが担っている。しかしお望みならゲーム対戦は可能である。

孫 すげえな。最新A I と一度プレイしてみたかったんだ！ クールだぜ！……でもさ、なんか変だよなあ？

イム ほう、何がであるかね？

孫 あの子、そんなに「せいたいマシン……」なんだっけ？

イム それは「生体マシンと非生体マシンとの相互補完」である。公式には「マン＝マシン・システム」と呼ばれている。

孫 うん、それぞれ。それだけさ？

イム それで？

孫 なんで他の国の連中、その「マン＝マシン・システム」っての、使わねえんだ？ それ使ったりや、ティターンズなんかにはやられねえんだろ？

\*2 RMA こと「革命的軍事革新」または「軍事における革命」の歴史の変遷については、マクレガー・ノックス、ウィリアムソン・マーレー共編著、今村伸哉訳『軍事革命とRMAの戦略史』芙蓉書房、2004年。

\*3 なおアメリカTVドラマ「GALACTICA/ギャラクティカ」(Battlestar Galactica、2005-2009年放映)においても、EPのティターンズと同様にコンピュータネットワーク経由で侵略する人工知性サイロンに対抗すべく、人類側の軍艦では人間のクルーが機器をハード的に直接操作する(例えば電話で口頭通信する等の)戦闘システムが採用されている。



イム 少なくとも対クラッキング防御の点では改善されるであろうな。

孫 じゃ、なんで他の国じゃ使われねえのさ？ 使える新技術ならさ……

イム ……使われて当然かね？ だから使われないのであるよ、逆説的であるがね。

カレン えっと、すみません、横から口を挟んで。でもわたしにもちよっとおかしな話に聞こえるんですが？

イム なるほど、これは技術というより財政の問題なのでありますが。例えばミズ枇杷坂、あなたは教師でいらっしゃったそうですね。どうでしょう、御国の学校において新教材を大量に、そうですね、画期的な教科書ソフト一千本としましょう、それを購入したいとして、欲しいと思った即日に購入できましようか。やはり申請書やら見積書やら、ややこしい書類を伴うのではありませんか？

カレン それはもう書類の山ですね。予算に限りがありますし。

イム それと同じ理由で、タイタンのRMA (Revolution in military affairs) はまだ各国の受容するところではないのであります。新しいからこそ、ね。

孫 さっぱりわかんねえな、新しいって良いことだろ？

カレン 新しいことは良い……ああ、な一るほど。仰りたいこと、わかりましたわ。

孫 何だよ、それ。俺にも教えてくれよ？

イム ではミズ、この純朴なる未来の世代に教えていただけると助かるのですが。

カレン わかりました。(と孫に向き直り) あのね、孫君、新しいものってね、良いものが沢山あるかもしれない。でもねえ、いい、タダとは限らないの。

孫 だから何だよ？

カレン そうね、例えばよ、最新の電腦を買うとするね、すごく性能の良いの、例えば。

孫 うん。

カレン でもね、買った翌日、もっと最新で性能の良い電腦が出たとしたら、買う？

孫 モチさ！ 買っちゃうぜ！

カレン でね、電腦がものすごく高くて、そう、ローン組まないと買えないとしたら？

孫 うーん、買うかもなあ。すげえイケけるなら。

カレン でもね、いい、また次の日、もっとすごくて、すごく高いの電腦が出たら？

孫 え？ えーと……なあ、カレン。いくら何だって電腦のハード、そんなすぐバージョンアップ出ねえって。毎日って、それさすがにねえってば。

カレン もしもよ、も・し・も。

孫 もしもかあ、もしもなら、うーん……買わねえかもなあ。どうせすぐ中古で同じの出るんだろ。でもさ、それって「マン＝マシーン」なんとかと関係あんの？

イム もちろん。ミズ枇杷坂のご説明はまさに的を射ている。いいかね、孫君。無料の技術というものは決して存在しない。すでに毎年毎年、各国は技術革新に追いつくべく、やっきになって新規の電腦や裝備を買いあさりながら予算を食いつぶしている。そしてこの予算は、孫君、きみの財布から出る金なのであるよ。

孫 エ？ 俺の？

イム そうであるとも。いいかね、毎日毎日、勤勉かつクタクタになりながら残業する、まあ、我が同世代の中高年官僚がだ、新たな金食い虫の「マン＝マシーン・シ



システム」を導入したいと思うその時は、自らの懐から金を出すなどありえない。それは税金と国債でまかなわれる。まあ、消費税やらで……君たち未来の世代が背負う。今この瞬間の技術革新のツケをね。我らの世代は君らの富を前借りして繁栄し、君の世代は我らの借財を背負って困窮する。その借財たるや、それは一生、いや、一万年休みなく働いても払いきれない巨額なツケになるであろう。これぞ真の「シンギュラリティ」ではないかな。さて、どうかな、私は贅沢に暮らしたい。君がそのための税金を永遠に支払ってくれるのだと大変ありがたいのだが。

孫 ゲェ〜ッ、税金かよ！ そりゃ、ウーン、ヤだなあ。そっかあ、なんかわかってきたぜ。なーるへそ、金かあ。カレンも大変なんだなー。

カレン そうよお。学校って、経費の請求とか、すごく大変なんだから。  
イム 軍隊もまた然りでありますよ。特に複数年度にまたがる予算編成の時はね。

孫 でもさ、そんな金大変なら、なんでタイタン軍大丈夫なんだ？ やっぱ変だよ。  
イム その答えは単純明快。タイタン軍は公的資金の無駄使いを許さない。スウェーデンやドイツ連邦由来のオンブズマン制度があるのだ。我らの国の財政はバランス志向である。いざという時に備え、複数年度にまたがって資金を蓄える。軽佻なるハイパーコープの売り文句に騙される他国人とは違ってね。

孫 オンブズマン？って何だ？

イム 独立の監察官集団である\*4。多元共同体 (Plurality) <sup>5</sup>から三年に一度選出され、全軍種の予算を厳しく査定する。そう……厳しく、いささか、ね……が、ともかくそれで冗費が抑制される。しかし基本はやはり健全財政であるな。我らの軍は俸給に恵まれているが、これは社会のみんなが勤勉で、政治が公正かつ透明であるからだ。戦艦が一千隻そろったところで、下町の市民が税負担から餓死するようでは、軍備そのものが国賊となってしまう。富国強兵、そう、良き国防は良き市民生活に仕える、これが我らタイタン軍のモットーなのであるよ。

孫 ふーん、なんかタイタンてスゲー国だなあ、オッさん……じゃなくて副長さん。

イム もちろん完璧ではないのであるよ。犯罪も起こればギャングもいる。ただし「マン＝マシーン・システム」に限っていえばそう難しい話ではない。上古からある助け合い、譲り合いの美德が技術によって具現化されたに過ぎない。逆に地球にそういうものがない理由は、政治や経済に思いやりの精神が欠けているからかもしれない。軍隊にヒトがいないのは、ヒトがいると都合の悪いことを軍隊にさせているからなのであろうね。だがそれとて、つまりは国事を委ねられたはずの官吏が、ただ己らの立身出世を誇りあうだけで、社稷を重んじ民を哀れむ誠の心に欠けていた、그러니까 세계가 괴멸 해 버린다。(と最後の一文は苦々しく韓国語で) ……失礼、なんでもないよ。(と穏やかに言い直して微笑む)

(カレン、会話を脇で聞いているうちに、何かを思い出したように微笑んで)

\*4 その実例と機能については、若松新「(西) ドイツ防衛監察委員制度の一考察—与野党の権力構造を分析する視点に立つて—」 ([http://dSPACE.wul.waseda.ac.jp/dSPACE/bitstream/2065/9896/1/41483\\_52.pdf](http://dSPACE.wul.waseda.ac.jp/dSPACE/bitstream/2065/9896/1/41483_52.pdf))

\*5 *Eclipse Phase Rulebook*, p.79 にある” Plurality” とは政治学、社会学の専門用語でもあり、邦訳すれば「多元性」「複数性」。政治思想である「多元主義」(Pluralism) に基づくこの用語を、本作品では「多元共同体」と訳す。



カレン 今お話しになったシステム、まるで共生ですね。ご存知ですか、インギンチャクとクマノミ。

イム その喩えは承知しておりますよ。私も地球出身だったものでして。

カレン あら、そうなんですか。てっきりタイタンでお生まれになられたのかと……。

イム いえいえ。艦長や私を始め、政府職員<sup>せいふしょくいん</sup>の大多数は移民であります。むしろ生まれも育ちもタイタンというのはまだ珍しい部類<sup>ぶるい</sup>でありまして。なにしろ我らの国は出来たてホヤホヤであります。地球と違い、出身や門閥<sup>もんぼつ</sup>で昇進<sup>しょうしん</sup>は左右されません。

孫 なあなあ、宇宙船の話をしてくれよ。それでその「マン＝マシーン・システム」がこの船なのか？

イム またまた御明察<sup>ごめいさつ</sup>。当艦のみならず、タイタン軍では九年前から導入<sup>どうにゅうず</sup>済みだ。同様のシステムは公共機関<sup>こうきょうきかん</sup>や各家庭でも流用<sup>りゅうよう</sup>され始めているがね。

カレン その、ええと「マン＝マシーン・システム」ですか？ 難しいメカのお話みたいですね。タイタンの人はそんなに機械にお強いんですか？

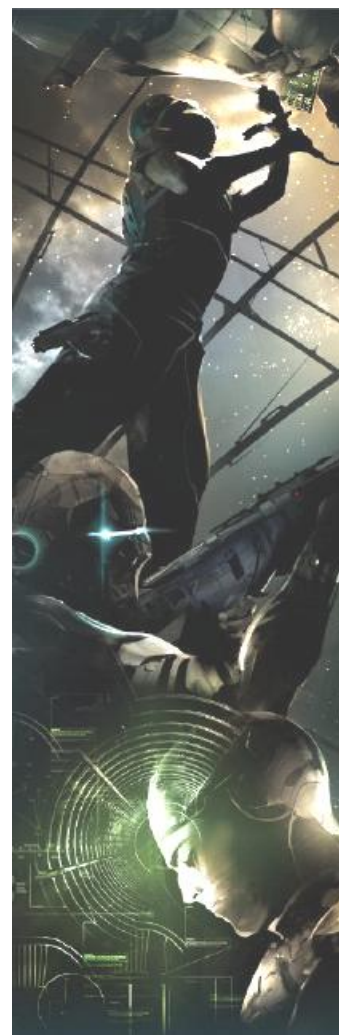
イム いえいえ、ミズ枇杷坂。その逆であります。アリストア艦長は情報戦の達人ですが、私となるとソースコードを読むのもAI頼りでありまして。民間人の大半もそうだと思いますよ。まあ一通りのメディア・リテラシーやLinuxのマナー<sup>しよとう</sup>は初等教育<sup>きょうい</sup>で習いますが。

カレン はあ、でも……AIってティターンズの仲間なんですよね？ だから地球のあちこちのコンピュータが乗っ取られているって、ニュースで流れてましたけど。

イム いやいや、そこが誤解の多いところなのでありますよ。失礼ながら地球の方々は、ハイパーコープに言われるまま、同胞を切り捨てて業務最適化<sup>ぎょうむ最適化</sup>を図ったところが問題だったのでしょう。電腦とヒトとの相互依存<sup>そうごいぞん</sup>、異分子<sup>きようせい</sup>の共生という多元主義的観点<sup>たげんしゆぎてきかんてん</sup>をライフスタイルの中核に据えていれば、AIが人類の文明を乗っ取るなど到底ありえないはずなのであります\*6。

カレン 相互依存<sup>そうごいぞん</sup>？ そうなんでしょうか？

イム そうですありますとも。例えば「マン＝マシーン・システム」はヒトの右脳と左脳<sup>さのう</sup>の関係に比喻されることが多いのですが。ミズ枇杷坂<sup>びわぎか</sup>、あなたには教職<sup>きょうしよく</sup>のご経験<sup>けん</sup>がおりでありますね。どうでありましょう、もし人材育成の一環として、感情



(Quoted from *Eclipse Phase Rulebook 3rd Edition* (Posthuman Studios LLC., 2011), p.20) <http://eclipsephase.com/releases>

\*6 このような社会が存在していた事実は、すでに本作「第二幕」脚注 No.18 で言及した福井憲彦、杉山正明、松田素二ほか『興亡の世界史第20巻 人類はどこへ行くのか』(講談社、2009年) pp.252-268, 279-291を参照。



を司る右脳を切り捨てて論理を司る左脳のみをグレードアップさせ、それで人間の才能が向上すると思われませんか？

カレン それは、まさか、ですよ。ああ……仰りたいことがわかってきましたわ。相反する要素の相互補完、それがこの船なんですか？

イム その通りであります。そして我々タイタン社会も然りでありますな。ヒトとAI、タイタン生まれと移民。そうした個々の構成員の普遍と特殊、共働と競争との摩擦がタイタンの多元主義制度を動かしているのであります。この世に生まれたからには一芸に秀でた変わり者たるべし、という意識こそタイタン社会の活力だと言ってよいでしょう。例えば裁判所ですと判事は常に複数。ヒトとAIとの混成チームで、直感と合理のバランスを模索しておるのです。いわばヒトの脳のシミュレーションでありまして。とまあ言いましても、軍務警務労働組合の委員会に初めてAIが参画した時はもめまして。もう四年になりますなあ。

カレン えっ、組合、ですか？ 軍人さんに組合があるんですね。

イム うん？ ああ、これは失礼。貴国の軍隊……たしか……自衛軍ですか、まだ労働組合が無かったのでありますか？ 元々はスウェーデンの制度であります\*7。

カレン あおう、その、よくは知らないんですけど。無知でお恥ずかしいです。

イム いえいえ、そんなことは。(と笑い) 実は、私もはじめは慣れませんでした。韓国にも無かったのですね。ですが職場環境のリスクを考えれば当然でありましょう。我々軍人は、ヒトであれAIであれ、れっきとした人権を有するのであります\*8。

カレン でも組合をお作りになるとき、お仕事に障りがあると反対されませんでした？

イム いえいえ、創設は政府肝いりでありまして。我が国では全ての業種で労働組合の設置が義務付けられておるのであります。確かに我々は徴兵軍ですが、じつは配属先の選択権は兵役対象者にありまして、組合を通じてこまめに就職紹介やら退役後アフターケアをしないと、優秀な学生は警察やら民兵隊に流れてしまいます\*9。何といたっても海軍は少数精鋭でありますから、芋虫に逸材をさらわれてなるものかと、人事担当は必死でありますよ。そうそう、昨年は提督たちが首都の下町連合会へ乗り込んで、モスクに集まったウマラー（イスラム学者）一同に涙ながらの陳情をしたのだとか……おっと、この話はまずいな。すみませんが、聞かなかったということ。シーツ。(と指を口に当てて生真面目に)

カレン 大丈夫ですわ、忘れました。(とわざとらしく生真面目にうなずき、笑いをかみ殺す)

孫 (退屈そうにしていたが、視線を別に向け) なあ、あっちレーザー砲塔だろ！ 俺、メッシュのミリタリー板で見た！ なあなあ、入っていいか、じゃなくて、入っていいです

\*7 21世紀現在、スウェーデンの「軍人協会」(Swedish Association of Military Officers [SAMO])の他、オランダ、ポーランド、ハンガリー、ブルガリア等における軍組織の労働組合については「軍職員の人権と基本的自由に関するハンドブック」OSCE(欧州安全保障協力機構)/ODIHR(民主制度人権事務所) (<http://www.osce.org/odihr>) in Warsaw, Poland in 2008(防衛省翻訳版)OSCE/ODIHR, pp.86-88.

\*8 21世紀現在、軍人の「結社の自由の権利」「表現の自由の権利」は、市民権の一環としてロシア、ヨーロッパで広く認められている。「軍職員の人権と基本的自由に関するハンドブック」OSCE/ODIHR in 2008.

\*9 類似例として、19世紀プロイセン・ドイツにおける「国民形成」の根幹であったと言われてきた「一般兵役義務」の制度が、いかなる抵抗を経て市民社会に受容され、地域の枠組みを越える「全国民のための中心的な教育機関」としてのプロイセン軍につながっていったかを論述したのは、丸島宏太「ドイツ陸軍—ドイツにおける「武装せる国民」の形成」三宅正樹、石津朋之、新谷卓、中島浩貴共編『ドイツ史と戦争—「軍事史」と「戦争史」』(彩流社、2011年)。



か？（と前方に走りかける）

**カレン**           こらっ、孫君！ 走らないのっ！（と孫に向かって）すみません、彼、ちょっとはしゃいで。まだ気持ちが落ち着かないようなので、少しだけ大目に見てもらえると助かるんですが……。 （と小声でイムに向かって）

**イム**           （小声でカレンに向かって）彼の御家族の一件でありますな？ 了解であります。おい孫君。砲塔は許可できないが、代わりにエンジン区画を見せてあげよう。核融合炉と物質＝反物質ドライブを並列された巨大システムだから、見ごたえあるぞ。ここから四デッキ下がった場所になる。それでいいかな？（と孫に向かって）

**孫**           反物質！ すげえぜ。どっから行ったらいいんだ？

**イム**           先ほどのターボリフトまで戻ろう。しかしレーザー砲塔が気に入ったのなら、パワーコンジットにも興味があるかね？

**孫**           知ってらー！ 「せんとー」用デバイスに「だいようりょう」パワー供給する「とくしゅどうかん」だろ。ペディアに画像載ってたぜ！

**イム**           またまた御名答。前方二〇メートル先、左折してすぐの壁に敷設されている。壁は透明だから見に行くといい。疑問があったら当艦付きオンブズマンの AGI「アルサン」にメッシュ経由でアクセスしたまえ。アカウントは「ゲスト」だ。彼女が質問に答えてくれる。パッドを使うといい。（と腰につけていたパッドを渡す）

**孫**           サンキュー！（と受け取り、パッドを連打しながら歩み去る）

**AGI アルサン**   《というわけで、ハロー。あたしがアルサンです(^-^\*)/》（と無音メッセージ）

**孫**           でさ、アルサン？ ってなんだ。暗号か？

**AGI アルサン**   《正式には「Alpha@Thunderbolt.Navy」の略記「ALTHUN」。タイタン海軍サンダーボルトに初配属されたスゴ腕 AGI って意味ね(^o^)/》（と無音メッセージ）

**孫**           じゃあ、あんたがここのコンピュータなのか？

**AGI アルサン**   《ちょっと違うわね。当艦の全ワークステーションと下位 AI を含めたソフトは備品だけど、あたしは監査役！ (^-'\*)。艦の備品が不正目的に使われていないかどうか、お目付として乗り込んでいるってわけ(\*^▽^\*)》（と無音メッセージ）

**孫**           フーン。まあいいや。そんでさ、ちょっと聞いてえことあんだけど……。

（孫、退場。イムとカレン、残される）

**カレン**           ありがとうございます。色々気を使っただいて。（とお辞儀する）

**イム**           実は息子がおりましてね。もう独立しておりますが、子供の頃によく艦を見せたものであります。昔を思い出させて下さって、こちらこそ感謝を。（と微笑んで一礼）

**カレン**           そうだったんですか。それで慣れておいでなんですね。

**イム**           それで思い出しましたが、ミズ枇杷坂の御不幸、御悔やみ申し上げます。僭越ながら御家族のこと、艦長より伺いまして。

**カレン**           御丁寧にありがとうございます。でもわたし、自分の境遇をあまり悲しく思えないんです。わたしより不幸な人、沢山いると思うと、何というか……。

**イム**           ……罪悪感でありますか？

**カレン**           ええ、それもあります。でもどちらかといえば……。



- イム                    どちらかといえば？
- カレン                    違和感、ですね。
- イム                    違和感、でありますか？
- カレン                    ええ、うまく言えないんですけど。明日は死んでしまうかもしれないのに、アテナの、いえ娘の死を嘆くというのが、何というか違和感があって……だって死者が死者を嘆くというのはどこか奇妙でしょう？
- イム                    仰ること、私にも分かるような気がします。死の意義を受容できるのは、明日の生が保障されている人に限る。言葉にすればそういうことでありましょか。
- カレン                    生の保障ですか……そうですね。毎日毎日、核兵器、化学兵器、ナノ兵器……そんなニュースに慣れっこになってしまって。自分の番を待ちくたびれている気がするんです。今ここにわたし、そういう意味では、生きているか死んでいるのか、わからない気がするんです。
- イム                    シュレディンガーの猫的状况でありますね。
- カレン                    ええ。箱を開けてみるまで生きていて死んでもいる、そんな気分なんです。
- イム                    ……そう、それで思い出しましたが、聖書\*10にこんな一節がありまして。主イエスが死者を甦らせた、もちろん古代のエピソードでありますよ。エゴ（人格）のバックアップから義体（Morph）へのインストールといった技術でなくてね。貴方のご参考になるかどうかは分かりませんが。
- カレン                    どんなお話ですか。
- イム                    ユダヤの地にラザロという男がおりまして、彼は主イエスの友人だったのですが、突然亡くなりました。そしてその死から四日後、主は彼の家族の元にやってこられて言われたのです、「あなたの兄弟は復活する」と\*11。この話は御存知でありますか？
- カレン                    いいえ。それでその続きは？
- イム                    ラザロの家族は主の御言葉を、来世での復活だと受け取りました。でもそうではなく、主はまさにラザロの亡骸を家族のまえで甦らせようとしたのです。でも家族はイエスの御力を信じませんでした。さ、イエスは何と言われたと思います？
- カレン                    さあ？……がっかりされたのですか？
- イム                    そうなのです。主は言われました、「もし信じるなら神の栄光が見られると言っておいたではないか」と。そしてラザロに命を与えたのであります。
- カレン                    それは、あの、矛盾してるんじゃないんですか？ だって死後に復活するなら、どうして現世でその人を甦らせるんです？ すいません、でも気になって。
- イム                    貴方の仰る通りであります。私も始めは理解に苦しみました。しかし今では主の御心が分かる気がするのであります。
- カレン                    それで、あなたのお考えは？

（イム、少し間を置いて、近くの座席をすすめる。カレン、会釈してその席に座る。イム、その隣に座る）

- イム                    思うに、あくまで私個人の考えであります、主は、生と死という区分に捉われ

\*10 『新約聖書』 <http://www.amazon.co.jp/dp/4820232010>

\*11 『新約聖書』「ヨハネによる福音書 11:17-44」



る人の心の小ささをたしなめられたのかもしれませんが。

カレン 人の心の小ささ、ですか？

イム ええ、考えてみてください。神の御子は、その御力を使えば、すぐにラザロを甦らせることがおできになったであります。でもイエスが最初になされたこと、それは問いかけでありました。「生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか」と。甦りそれ自体が主の目的だったのではない。ではなぜ御業を為されたのであるか？ 主は御力で生と死との境界を容易く越えられ、それを以って、繁栄を飲んで死滅を忌むという我ら人間の心の狭さをさとされた。この世界には生死を超越した偉大な何かがある、それは幻でなく現実に存在する、そう示された。私はそう解釈いたします。

カレン でも、それならイエスはなぜそう言わなかったんですか？ だって他人が誤解してしまうかもしれないじゃありませんか？

イム ミズ枇杷坂。それこそ知識と信仰の違いなのであります。御業の解釈は信徒一人一人に委ねられたのです。求めよ、尋ねよ、と。

カレン 知識と信仰の違い？

イム そうです。主は言われました、「神に背いた時代の者たちはしるしを欲しがすが、預言者ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられない」と。もし主が御心をことごとく打ち明けられても、人が御言葉をただ記憶するだけなら、それは空しいことであります。大昔の記録デバイス、例えばCDを思い出して下さい。聖書でも讚美歌のサウンドファイルでも保存可能でありましたが、あんなモノに信仰心がありましたか？ よく間違われますが、信仰とは知識ではありません。燃えあがり、突き進む信念であります。神の教えを一ビット一ビット暗記するのではなく、問い、苦しみ、進む。それが神の国に至る道であります。分明でないからこそ分かれようと努め、勝ち目がないからこそ戦い、定かでないからこそ築こうとするのであります。神の愛は人を導く「しるし」なのであります。さあ、御理解いただけましたか？

(カレン、真剣にうつむいて考え込む様子。イム、話終わると沈黙してカレンを見つめる)

カレン ……あのう、正直に言って、よくわかりません。多分わたしの理解力不足なんでしょうね。すいません。

イム いえいえ、貴方に落ち度はありません。むしろこちらの説明が悪かった。

カレン その、単語一つ一つの意味は理解できるんですが、全体がピンと来ないんです。ごめんなさい、抽象的なことしか言えなくて。翻訳機のせいですね。

イム では、こうお考えになられてはいかがであります。そもそも、聞けば読めば何でもすぐ分かる、そういう考えこそ、無知のなんたるかを知らない浅薄さの産物なのでは、とね。何かを知りたいなら、知りたい内容の価値にふさわしい労苦を経なければならぬのです。ソクラテスは「汝自身を知れ」という神託に苦しんだそうであります。知るといふ行いは、そういう真摯なものでは？

カレン ……それで、それとわたしの状況とに、どう結びついてくるんでしょうか？ それって先ほどあなたが仰っていた、サイボーグを選ばない第二の理由と関連しているん



ですか？

イム その答えは、私には分かりません、でありましてね。(と微笑む)

カレン あのを、それって？(とげげんな表情)

イム 無責任な発言に聞こえるかもしれませんが。無礼は御許しあれ。ただしあとは貴方が御自身でお答えになること。他人の判断に従うのではなく。違いますか？

カレン ……自力で信仰を見出せ、と仰るんですね？ 娘は死んだ、わたしは生きていますという事実を云々するのではなく。

イム あくまでミズ枇杷坂、ただの世間話でありますよ。あくまでね。

カレン ええ。でもありがとう。気が楽になりましたわ。

イム 気が楽になったのはこちらの方であります。久しぶりに信仰を語り合うことができて幸いでありました。ありがとう。

カレン ダンと一緒に仕事をしておられるのでしょうか？ お疲れになるお気持ち、わかりますわ。

イム 貴方は艦長をあまり買っておられない？

カレン いえ、そうじゃないんです。ただ……これ、彼女には内緒にしてくださいませんか？

イム 宜しいですとも。

(イム、沈黙してカレンを見つめる。カレン、ポツリポツリと話しはじめる)

カレン ダンは、わたしには重たすぎるときがあるんです。

(カレン、うつむき気味にボソボソと続ける)

カレン 一見、輝かしくてエネルギー、なんでもできるスーパー・パーソン。なのになんとなく余裕がないんですよね。こっちが心配になってどうしたのって聞いても、「大丈夫！」の一点張り。でも、そう言ったのに仔犬のような目でわたしを見つめてくるんです！ 高校生のわたしは自分のことだけでも手いっぱい、当時はちょっと重たかったんです。(困ったように顔を上げる) 悪いことをしました。

(イム、ただ黙って、カレンの話の合間合間に少しうなづくだけ)

(二人、しばらく黙ったまま。イム、やがて口を開く)

イム 全寮制の学校だったのでありますか、日本の？ 御二人がおられたのは。

カレン ええ。中高一貫のミッションスクール。いわゆるお嬢様学校ですね。ダンはお父さんの仕事の関係とかで、日本に住むことになったんです。始めの頃はたどたどしい日本語で……わたしたち、時々こっそり外に抜け出してたんです。それでウィンドウ・ショッピングしたり……もちろん彼女のおかげだったし、大好きだったんですけど。わたしはあんなに何でもできるのに何が不満なのって思った。わたしにないものをみんな持っているくせになって……妬ましかったんですね。(苦い笑いを浮かべる)

イム 双葉の頃からトラブルメーカーでありますな、艦長は。



(二人、互いに見合って明るく笑う)

イム ではミズ枇杷坂、それなら御願ひがあります。貴方<sup>あなた</sup>にしか出来ないことを。

カレン はい？

イム どうかそのまま艦長の友人でいてください。ただ彼女のそばで話を聞いてあげてください。今この艦では、艦長<sup>じゆんすい</sup>の純粋な友人となることができるのは唯一<sup>あなた</sup>貴方だけなのであります。代わりのおりません。ですからせめて今日だけでも友人でいてあげてください、ダン＝アリストアという女性にとっての。

カレン ああ……おっしゃりたいことはわかります。できるかはわかりませんが、でも、どうして今日なんです？

イム それは……。

(イム、周囲を窺う。誰もいない。イム、ポケットから小型の装置を取り出してボタンを押す。微かな甲高い音が初めのうちは聞こえるが、すぐに止む。イム、また話を続ける)

イム それはでありますね、実はティターンズとの戦いは、報道<sup>ほうどう</sup>で伝えられているよりずっと悪い状況であります。地球は持ってあと半年であります。各国の軍や警察など治安機関<sup>ちあんきかん</sup>さえ逃げ出し、その後始末を民間の軍事警備会社<sup>ぐんじけいびがいしや</sup>(Private Military and Security Conpany)に任せるほどであります。国連を始めとする戦争指導者<sup>しどうしや</sup>の多くは、地球陥落<sup>ちきゅうかんらく</sup>を前提<sup>ぜんてい</sup>にして方針を立てておるのですよ。

カレン そんな……でも、でも国連は地球を見捨てない、地球の人をみんな脱出させるって、「頑張ろう、地球。立ち上がれ、市民」って千葉TVでもコマーシャルやってましたよ？(と驚いて)

イム 何もかもペテンであります。人に向かって頑張れと叫ぶ道徳家<sup>きけい どうとくか</sup>の大半は、そもそも他人事<sup>たにんごと</sup>だと思っているから、戯言<sup>ざれごと</sup>を臆面なく連呼できるのです。

(イム、声がだんだんと陰しくなる。カレン、最初は驚いたように、やがてうつむいて聞き入る)

イム いいですか。国連にはすでに地球防衛<sup>ちきゅうぼうえい</sup>の意志はありません。彼らは市民を救出すると称していますが、実態はハイパーコープによる権益回収、重要施設を引き上げる隠れ蓑<sup>かかくみの</sup>なのであります。難民のピストン輸送を行うと揚言<sup>ようげん</sup>してはいますが、おそらく今回が地球発船団の飛ぶ、ほぼ最後であります。第一に燃料が足りません。地球にあった貯蔵<sup>ちよざう</sup>タンクはかなり破壊されましたから。第二にですが、国連WHOの部外秘レポートによれば、月と火星を合わせて、せいぜい三億人を収容するのが限界であります\*12。しかも、これはまだ軍機<sup>ぐんき</sup>ですが、地球＝月ラグランジュ点の第一(L1)、第三(L3)にあったコロニーがティターンズに占領されてしまいました。地球と外世界<sup>がいせかい</sup>(offworlds)とを結ぶ通商ルートが敵手に落ちつつあるのであります。それを各国は承知の上で、いや、むしろ船団による難民輸送を、地球に残った利権<sup>りけん</sup>を漁るラスト・チャンスとばかりに利用しております。なにしろ債務超過<sup>さいいむちようか</sup>に陥った地球の各国は、もはや美術品や機密情報<sup>きみつひん</sup>といった現物

\*12 AF10におけるルナと火星の人口については *Sunward*, pp.48,93.



を利息の支払いにあてる始末でありますから。これで、なぜ小惑星群、木星、そして我々タイタンといった遠い国々まで船団護衛に加わったのか、御分かりますでしょう。盲人を曳く盲人、瀕死の病人にたかる吸血コウモリ……人類にとって本当の敵はティターンズではありません。全ては……全ては国際協調の名で為されるマネーゲームなのであります。

(カレン、目をいからせる。イム、カレンと目を合わせるのを止め、どこか遠くの方を見つめて話す)

**イム** この話は、艦長や我が国のエージェントが犠牲を払って掻き集めた極秘情報の概要であります。非常な犠牲を払ってのね。本国には暗号通信で報告済みです。政府はタイミングを見計らって当艦に帰国を命じるであります。今やタイタンさえ戦場になろうとしております。地球系ハイパーコープかティターンズ、どちらかが一年以内に侵略してくる。これが我が政府の首脳が出した結論であります。故にサンダーボルトは帰国命令に従わねばなりません。地球に何十億人残ってしようと。それが、いえ、それこそ真実の戦況なのあります。(とため息)

**カレン** でも、でもハイパーコープってそんなに……悪いんでしょうか？

**イム** ふーむ、そうでありますな……話は変わりますが、貴方は、コンピュータのOSをグレードアップするたび、法外なお金を支払った御経験はおありですか？

**カレン** ええ、もちろん。でもそれって、自然なことじゃ、ありませんか？

**イム** とんでもない。あれはね、作為以外の何物でもありません。ハイパーコープはですな、始めこそ善人面ですが、ひとたび市場を独占するや、商品の質は落とし価格は吊り上げ、まさに詐欺商法でありますぞ。(と強い口調で) 宇宙国家タイタン連邦にとって、ハイパーコープは不倶戴天の仇敵なのであります。

**カレン** どういうことですか？

**イム** 火星に行かれたことは？

**カレン** いいえ、宇宙はこれが初めてなんです。

(イム、少し黙って考え込み、話し始める)

**イム** もう四〇年になりますかな。私は火星に一時おったのであります。当時は宇宙開発が大々的に宣伝され、毎年毎年、幾千幾万の労働者が火星にやって来た。ハイパーコープの輸送船に乗り込んで。当時を御記憶でありますかな？

**カレン** ごめんなさい、それってちょうどわたしが生まれる前の話ですよ。ドキュメンタリー番組で見たことはあるんですけど。

**イム** これは失礼。ではそのドキュメンタリーでは、火星に旅立った労働者がその後どうなったか、語られておりましたかな？

**カレン** ええと、ええ、確か……火星のあちこちに集合住宅が建てられて、人並みの暮らしができるようになったとか……と思いますけど。

**イム** その集合住宅を実際に御覧になりましたか？

**カレン** あ、いいえ、さっき申し上げた通り……。

**イム** 私は見た。あれは一生忘れられない。(と厳しい声で)



カレン 何をご覧になったんですか？

(イム、深呼吸する)

イム 火星に着いた労働者は一日当たり、といっても火星の一日は地球の約二五時間ありますが、多くが一日当たり一二時間労働に従事したのであります。過労で次々死にました\*13。だが交替要員はいくらでも来る。ヒトの命は機械より安上がりでありましたな。(と軽く笑う) ドキュメンタリーの集合住宅は、恵まれた幹部向けの施設でありました。鉄条網で囲われ、一般人は入れません。そうやって大量かつ安価な資材が地球に送られたのであります。地球人の需要を満たすために。

カレン そんな……ひどい。本当なんですか？

イム 私には、その当時、事情ができて、「レッドノーザン社」(Red Northern)の鉄道路線、その建設現場で働いておりました。よく記憶しておりますよ。毎日毎日、誰かしら死にました。仲間の死体をこの手で埋葬、といっても近場に穴を掘って投げ込む。だがそんな日常にも次第に慣れていきました。大気は薄すぎ、食事は劣悪。ときどき妙な味のする肉が出る。人肉だと噂が流れましたが……食わねば生きていけなかった。テラフォーミングしたあの星、まだ赤いのは、あれは人の血でありますな。(と軽く笑う)

カレン あの、すいません……そんな話、全然知らなかったんです。

イム しかたないことであります。(とうなづく) 地球のマス・メディアはハイパーコープに牛耳られておりますからな。それに貴方個人の責任ではない。

カレン ええ、でも……それで、その後はどうなったんですか？

イム ある日、監督からニュースが回ってきました。希望者には脆弱な生身にかわるロボット義体「ケース」(Case)を安価で提供する。睡眠も食事も不要、疲労からも病気からも解放された無敵のサイボーグに変身。そんなふれ込みでありましたな。かなりの数の連中が、差し出されたパッドをロクろく読まずサインすると、トラックで連れていかれました。数日すると……銀ピカの金属ボディどもが帰ってくる。ボディ代の返済は給料から天引きという決まりでありました。

(間)

イム ところがせっかくの金属ボディも、やがて関節に砂が入って動かなくなる。すると新型ボディ「シンス」(Synth)なるモノが提示されたのであります。(と笑う) 代金は上乗せの借金。それを見て悟りました。ああ、このまま働き続けたら、過労死か、いっそロボットになってしまっただけで死ぬことさえできない借金地獄か……それで脱走したのであります。天にまします神様に誓って、俺は銀ピカの借金ロボットにだけは絶対ならんぞ。あの気持ち、生涯忘れられませんな。

カレン そんな無茶苦茶なお仕事、どうしてお辞めにならなかったんですか？

\*13 ここでイムが説明しているのは、EP 公式設定でさえ火星での労働実態を「奴隷制」(slavery)「味気のない豆腐を食べてはラッキーだと言いつつ」(we were eating unflavored tofu and calling ourselves lucky.)と認めている所の「ハイパーコープや行政による年季奉公人たちの利用」(hypercorp and government use of indentured infugees)の最悪の姿である。詳細は *Eclipse Phase:Sunward* (Posthuman Studios, 2010), pp.96-98.



イム 退職は自殺行為でありましたな。(とあっさり)  
カレン なぜなんです？ 辞表を出せなかったんですか？  
イム 労働キャンプは見張られておましてね。事前説明と違って、線区の完成まで賃金の支払いはない。休みも退職も許されない。「働けば自由になれる」(Arbeit mahct frei)、それが監督の口癖でありました。反抗者はロボットミー手術やら何やらを施され、かつての仲間を見張る殺人ガードマンに成り果てる。(とかすかに笑う)  
建前では護衛でありましたが、何から何を護衛したのやら。(と失笑)  
カレン 警察や人権団体はいなかったんですか？ 助けを求められそうな。  
イム ああ、ミズ枇杷坂。(と笑う) 地球系ハイパーコープは強大ですぞ。官憲も慈善団体も連中の雇われ者でありました。悪魔が助けてくれるとでも？ (とまた笑う)

(イム、カレンに向き合う)

イム 御分かりですか、ミズ枇杷坂。タイタン市民の多くは、そんな風に命からがら土星にたどり着いたのであります\*14。地球から、貴方の星から逃れて、ね。

(間)

イム そもそもタイタンが軍隊を設立したのは、地球系ハイパーコープと裏取引した海賊の襲撃に、もはや耐えかねたからであります。連中との交渉は幾度も幾度も裏切られ、輸送船は襲われ続けた……ご存知でありますか？ タイタンは金属資源を輸入に依存しております。通商ルートを断たれたら、我らには凍死あるのみ。ハイパーコープはそれをいいことに、鉄やチタンの劣悪なインゴットを、品質検査でハネられた不純物を高値で売りつけた。誰も助けてくれなかった。NAC (North Atlantic Consortium) がどれほど国連で窮状を訴えようと、地球は動かなかった……最後の希望、それが海軍設立だったのであります。

### 〈土星圏から見た地球〉



NASA の探査機カッシーニによる撮影。画像中の右下に「↑」で示されている点が、土星圏から見た地球 (撮影時には約一五億キロの彼方)。

Quoted from "The Day the Earth Smiled." NASA. July 23, 2013 ( [http://www.nasa.gov/sites/default/files/styles/946xvariable\\_height/public/20130722\\_annotated\\_earth-moon\\_from\\_saturn\\_1920x1080.jpg?itok=DIJv2DwN](http://www.nasa.gov/sites/default/files/styles/946xvariable_height/public/20130722_annotated_earth-moon_from_saturn_1920x1080.jpg?itok=DIJv2DwN) )

\*14 タイタン連邦の前身である NAC (North Altantic Consortium) が地球環境の変化によって苦難の入植計画を推進せざるを得なかった経緯は *Eclipse Phase: Rimward*, p.92.



(イム、ため息つくことしきり)

**イム** 我らタイタン人は、いつか PKF (平和維持軍) がやって来てくれと待ち望んでおりました。通商ルートが安全になって、まともな金属を外の世界に買いにゆける日をね。だが地球は遠すぎ、冷たすぎた。皆で義捐金を出しあってハイパーコープから泣く泣く購入したフリゲート艦、それがタイタンの軌道上で爆沈し、残骸でドーム都市が押し潰された惨劇、御想像できますかな？ 翌年、我らは徴兵制を導入しました。すると地球の平和主義者に非難された。

**カレン** でも失礼ですけど、徴兵制って、そのう、いやがる人を無理やり兵隊にするんでしょう？ 批判されたって仕方ないんじゃないやありませんですか？

**イム** ハハハ (と軽く笑う) ……よろしいですか、ミズ枇杷坂。我らタイタン軍人はみな「制服を着た市民」ですぞ。平時には週休がありますし、有給休暇も戦時加俸もあります。それに我が国の徴兵制は一種の投票なのでありますよ。

**カレン** 投票？ あの、軍隊があなたの国の投票なんですか？

**イム** それはこういうことです。我らの国制では、良心的兵役拒否が認められています。軍務以外にも、警察官、病院の看護師、でなければ CentOS の開発 SE といった職に就けばよろしい。富む者であれ貧しい者であれ、インフラ従事の義務を三年間果たす。それこそサイバー民主主義の政治なのであります。

**カレン** ええっと、義務が民主主義ですって？ (と眉をひそめる)

**イム** その通り。特に社会のエリートこそ義務を果たさねばならないのです。海賊に通商ルートを脅かされ、資源不足にあえぐ中で、市民一人ひとりがコツコツ始めた鉄クズ回収、食事の炊き出し、そんなボランティア活動から始まったのが我らの徴兵制なのです。そもそもタイタン海軍は、オンボロタンカーで編成された即席の自警団でありましてね。通称「神風タンカー戦隊」(Kamikaze Tanker Squadron) こと略して「カツツ」(KATS)。名前は中々勇ましいでありますよ？

**カレン** ええ、まあ。(と苦笑い)

**イム** むろん普通の軍隊ではない。警備隊には老若男女、仏教徒もムスリムも悪魔教徒も入隊しました。艦は古く、兵はシロウト。でもね、士気だけは、そう、士気は高かった。手弁当で船体を修理し、ウェブ上のオープン・キャンパスでドクトリンを議論し……海賊やハイパーコープに負けるな。皆そう意気込みましてね。やがて NAC 経由で教官や物資がやってきて、大学のワークショップで新兵器が開発され、我が軍は劇的に向上していったのであります\*15。あれはね、なんと申しますか、そう、軍事革命 (Military Revolution) ……。(と微笑む)

**カレン** そのう、皆さん、大変だったんですね。ご苦労されたみたいで。

**イム** 苦労？ (とげげんそうに) いやいや、御分かりでありますか、ミズ枇杷坂？ 軍拡に一票を投じるタイタン市民は、自らすすんで国軍に入るのであります。福祉に一票なら病院や保育園に入り、教育に一票ならアーハス市の自治大学に勤める。市民一人ひとりが同僚と手を携え、自らの手で自らの国をデザインす

\*15 先行事例としてはイスラエル独立当時、イスラエル国防軍がパルチザンから正規軍へと成長した経緯についてのハイム・ヘルツォーグ、滝川義人訳『図解 中東戦争—イスラエル建国からレバノン進攻まで』原書房、1990年、pp.6-41, 59-61.



る。これが三年間の社会奉仕活動、いや、徴兵制なのであります。

カレン 自分で自分の国をデザインする？ そんなこと、本当にできるんですか？

イム 可能か否かは問題ではない。道は遠いが、しかし行く。それがタイタン魂。我らタイタン軍はね、宇宙市民のために決起した革命軍なのであります。政治家の私兵なんぞではありません。ところが……（と失笑）地球の平和主義者にはこっぴどく罵倒されまして。やれファシズムだ、テロリストだと。

カレン でも徴兵制って結局は強制なんでしょう？ どうしてもイヤがる人はどうするんです？ そういう気の毒な人たち、大目に見てあげられないんですか？

イム では日本の義務教育では、児童の学費を支払えない親、宿題をサボり授業に欠席する勤労学生、そういう気の毒な人たちを大目に見てあげたのでありますか？

カレン そんな……学校は人のためになりますけど、軍隊は人を傷つけるでしょう？それで民主主義なんですか？ 皆さん、ちゃんと投票に行ってるんですか？

イム 我がタイタンの直接民主主義政体ではですね、ミズ枇杷坂、無料で加入できるサイバー空間を通じて市民一人ひとりに政策の是非が問われるのであります。外交しかり、財政しかり、国防またしかり。軍務従事者などを除き、選挙活動に不参加の同胞市民にはペナルティが課されるのでありますよ\*16。

（イムとカレン、しばらく無言）

カレン そのう……それで平和主義の人たち、どうして非難したんですか？

イム なんでも、辺境の小国ごとき滅亡しようと軍備はイカンのだそうでありますな。軍隊を持ちたいなど平和への誠意が足りない。海賊の出没は自己責任である、とね。平和を愛する貴方もやはり同意見でありますかな？

カレン ああ……ごめんなさい。わたし達、そういうこと全然知らなかったんです。

イム そうでありましような。ですが知ったところで何か行動されましたか？

カレン そんな……そうかもしれませんけど、でも……。

イム 別に貴方個人を責めてはおりません。しかし地球の道徳家によると、強き者こそ宇宙の正義、負け組に人権なぞ無いのだそうでありますな\*17。ハイパーコープとの雇用契約も労働者の自己責任なのだから。その同じ地球の論客が、ハイパーコープへの助成金を弁護する。インフラを担う大企業の保護育成は平和を愛する市民の自己責任だから。自己責任、なんと便利な言葉であるか。

（イム、暗くこわばった顔色でカレンに向き直る）

イム そうした貴方がた地球人の御高説を拝聴しながら、海賊との戦いで死にゆく友を、妻子を埋葬しつづけた我らタイタン人が、血のにじみ出る思いでこのサンダーボルトを完成させたこと、貴方がたに御分かりでありますか？ かつての故郷に、いま滅びつつある青い星にどんな思いを抱いてきたのか、貴方がたに御分かりでありますか？ そうそう……地球では、たしか化粧品開発に動

\*16 "Titanian Voting and Reputation," *Rimward*, p.199.

\*17 加藤弘之『人権新説』（1882）. 国立国会図書館近代デジタルライブラリ. (<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/798590>)



物実験が許されているのでありましたな。貴方の口紅の一本……たった一本のために、火星やタイタンの、遠い星々のモルモットがいくら死のうが、地球人にはささいなドキュメンタリー（と軽く笑う）……ああ……（と首を振る）しかし貴方個人には何の責任もない。非礼の数々、どうか御許しを。（と頭を下げる）

（間）

カレン　　じゃあ……じゃあ、あなた達こそ、ここでいったい何をしているんですか？ わたしたちを、地球の人々を騙しているんですか？

（イム、かぶりを振って、再び穏やかに話す）

イム　　いいですか。アリスター艦長は当初から、この欺瞞に満ちた難民輸送計画に反対しておられました。輸送船は、奇跡が起ころうとも八億足らず、そう、地球に暮らす数十億人のせいぜい一〇%しか連れ出せない気休めの救出に投入されるのではなく、反攻作戦のための兵站線に充当されるべきである、とね。そして地球社会が滅びるなら、人類の勝利という成果だけが彼らの、つまり貴方がた地球人の犠牲を正当化する、とね。しかしながら難民輸送計画が国連安保理で可決された後、艦長はあくまで職務に忠実たろうと決断されたのであります。よく聞いて下さい。彼女はね、タイタンの国益のみを重んじているのではありません。「政府や国家はいずれ滅ぶが、明日の人類は生き残る。だから政治に関わる者は人類史という審判で裁かれる覚悟を持たねばならない」。そのように艦長は首相閣下じきじきに訴えられたのであります\*18。だから彼女が派遣され、一〇一万の人を乗せた船団の安全は、ダン＝アリスター大佐の手腕に掛かっているのであります。どうか、この点を御理解いただきたい。

カレン　　でも……それとわたしと、どう関係してくるんですか？

（イム、微笑む）

イム　　さあ、ここからが肝心な点であります。ミズ枇杷坂、私は、この半年の戦いを共にして、アリスター艦長は天性の指揮官だという確信をますます深めました。しかし今、艦長にかぶさるストレスは過酷なものであります。彼女が開戦以来、ロクに眠っていないのを御存知でありますか？ 極度の重圧は、どんな才能の輝きをも吹き消してしまいます。我ら、それに船団の一〇一万人が助かるのに必須の、その才能をね。だからこそせめて一人、この指揮官を癒し、励まし、支える人が必要なのであります。彼女のためだけでなく、大勢のヒトの未来のためにも、ね。

（二人、またも沈黙）

カレン　　でも……あなた達じゃだめなんですか？ 一緒に船に乗っている皆さんの方が適任じゃないんですか？

イム　　ああ、ミズ枇杷坂、駄目なのであります。我らサンダーボルトの乗員は、いいで

\*18 タイタン連邦の政治システムについては"Government", *Rimward*, pp.94-95.



すか、友人でなく、艦長の「戦友」(comrades)なのであります。

カレン あ、戦友、ですか？ お友達じゃなくて？

イム こういうことであります。我らは面白半分でこの空母に乗っているのではありません。公務ゆえに乗船し、公務ゆえに戦うのです。サンダーボルトの全乗員は強い絆で結ばれております。ですがその絆は軍規あつてのもの。大勢のヒトの幸せを重んじようとする我が国の無政府主義\*19が絆の根幹なのであります。無二の絆ですが、純粋な友情ではありません。我らは公務員であり、特定の同胞市民への感傷は二の次なのであります。どうです、これで御分かりでは？

(二人、またも沈黙)

カレン それではあなたが求めているのは……。

イム ええ。

カレン その、ダンに対してただの友達として接することができる「ピワ」なんですね。

イム そう。公務からでなく、ただ友人として友人でいられるミズ枇杷坂をね。

(二人の沈黙、数分続く)

イム もう御分かりでありましょう。当艦の副長にもカウンセラーにも他の誰にも、青春のさわやかな思い出を、軍務という試練を知らなかった無垢な時代の思い出を、あの人の脳裏に甦えらせることはできません。それは貴方だけに為しえること。ダン＝アリスターという一人の女性の、その美しい青春の一部、貴方だけにね。

カレン なんだか責任重大な気分になってきましたわ。あのダンの子守り役なんて！

イム 気兼ねなく艦長に接してくだされば宜しいのでありますよ。せめて一日だけ、ね。

カレン まあ、なんとか……先ほど申し上げましたけれど、ご心労、お察しいたしますわ。

(イム、何かを少し迷った末に口を開く)

イム 実はですね、ミズ枇杷坂、私は一度ダンと戦ったことがあるのですよ。

カレン えっ、戦った？

イム 模擬戦ですがね。もう一二年になりますか。当時の彼女は中尉で戦闘機パイロット、私は小型砲艦を指揮する大尉。ダンも戦闘機一機、こちらは自艦で戦ったのであります。どうなったと思います？

カレン なぜ戦うことに？

イム 先ほど「マン＝マシーン・システム」の話を上りましたね。

カレン ええ。

イム それを、誰が参謀本部に提案したと思われませんか？

カレン まさか！

イム 当時の私は正直申し上げて、いささか傲慢でありましてね。一人の有能なハッカーは過度に電脳化された艦船一隻に勝る、それは実戦で証明できる。最初に

\*19 Eclipse Phase の時代における「無政府主義」(anarchism) は、政府の存在自体を拒絶するというより、民主主義社会における公権力の必要性を認めた上で、非民主的政府への反対、あるいは特権階級による寡頭政治への反抗という意味合いへと変化しており、その範疇には 21 世紀現代の「福祉国家」「社会主義」等の概念が包含される。



その話があった時、選ばれた私は馬鹿にされたと思いましたよ。アマチュアが妙な提案をしたばかりに、プロの自分が益体もない遊びに付き合わされた、とね。ですが状況開始から六〇〇秒、艦の全ディスプレイに高笑いする小娘のアイコンが表示された時、つくづく思い知らされた。世の中には戦いの天才がいる。

カレン           でもそれなら、なぜ今、あなたはここに？

(イム、少し俯き、そしてまた顔を上げる)

イム           模擬戦の後、彼女は私に言ってくれたのであります。「本官が大尉に勝てたのは僥倖です。偶然に左右される戦法は使えません。できれば先輩として、問題点を率直にご指摘くださいませか？」とね。それから四年後、彼女に階級を飛び越されましたが、悔しいとは思いませんでした。いや、思ったな。しかしね、嬉しくもあったのです。天才に評価されたことがね。戦闘空母サンダーボルト級の開発が始まると、プロジェクト・リーダーとなったアリスター中佐は、イム＝スギル少佐こと私を副リーダーの地位に誘ってくれたのですよ。今は彼女が大佐、私が中佐。我が軍の人事システムは有効に機能しておるのであります。

(イム、フーッと息をつき)

イム           まあ、気苦労はあります。しかしね、名誉を知る戦友と共に働くことには喜びが伴うものであります。あなたにも似たような御経験がおありかと思いたしますが。

カレン           ええ、わかりますわ、とても。

(イムとカレン、それぞれ前を向いて話続ける)

カレン           今、ダンは戦っているんですよね。会議という名の……。

イム           そう、会議という名の戦場で。言論を弾丸として。我らのため、明日のため。

カレン           それが終わると、この船も戦いに行くんですね。

イム           ええ。それが我らの公務であります。

カレン           その仕事はいつ終わるんですか？

イム           さあ？ ですがいつの日か、必ず。

(孫、駆け足で戻ってくる。イムとカレン、はっとして立ち上がる)

孫           おーい、ここにいたのかよ。そろそろエンジン見に行こうぜ。下の階なんだろ。

イム           おやおや、明日が戻ってきましたか。(とカレンに) いいだろう、では下に案内しよう。(と孫に) ミズ枇杷坂はいかがでありますか。(とカレンに)

カレン           じゃあ御一緒しますわ。この子、一人にしておくと、どこに行くのか心配で。

孫           ナ～ニ言っただい、カレン。俺いないとダメなのアンタの方じゃないか。

イム           まあまあ。ではターボリフトはこちらであります。参りましょうか。

孫           俺、先を偵察してくるであります～。(と走り去る)

カレン           こら、ちょっと孫君、走るなっていったでしょー！(と後に続く)



## 第四幕第二場

註

サボも死んでしまった。彼はハンガリー人の無口な農夫で、背の高さがメートルほどあり、そのため他のものよりずっと飢えていたが、それでも力のある限りは、押したり引いたりする作業で、最も弱い仲間を助けるのをためらわなかった。ソルボンヌ大学の教授であったロベールは勇気と信頼感を周囲に発散し、五カ国語をしゃべり、そのすばらしい記憶力ですべてを記録しようと身をすり減らしていた。もし彼が生き延びていたなら、わたしが答えられない疑問に答えられたらう。

……こうしたものたちや他の無数のものたちは、その優秀さにもかかわらず死んだのではなく、その優秀さのために死んだのだった。

—プリーモ・レーヴィ、竹内博英訳『溺れる者と救われる者』(2000)  
<http://www.amazon.co.jp/dp/4022574917>

(場面は大きな講堂の内部らしきところ。これまた大きな円卓に、それぞれ背広や軍服を着込んだ偉そうな面々がズラリと並んで座っている。円卓の席のそれぞれには「国連事務総長」「アメリカ合衆国」「EU」「中国」「木星圏」「エクストロピア」などのカラフルな表札が掲げられている<sup>20</sup>。照明はやや薄暗く、奥の巨大なディスプレイに「灯火管制中」。円卓の中央では丈高く、ハンサムな若々しい白人男性が朗々と演説している。円卓の一角には「タイタン」と記された表札が掲げられ、そこにはハウエル大使、それにアリスター艦長の立体映像が座っている。二人は小声で話している)

ケント ……では、これで「不朽の正義」攻撃作戦のブリーフィング、終わり！ もう時間ないからさ、質疑応答はオミット！ みんなの意見終わり！ はい、挙手！ \*<sup>21</sup>

アリスター エエかっこしいのナルシストが……こんな暴論を黙って見過ごせと、大使？

ハウエル 堪えろ、大佐。それが国際協調だ。気持ちはわしとて同じだよ。

(円卓のあちこちから挙手が。タイタンを除く大半の列席者が手を挙げる)

ケント ほら、みんな賛成！ これが世界の民意、ミ・ン・イ！ おい、そうだな、総長。

国連事務総長 ウ、ウム、そうですね、高等弁務官殿。

ケント それでは、明日はいよいよ、ナマイキなティターンズを蹴散らしましょう。敵を打ち破って、新しい宇宙を作るんです。ボクらこそ地球の正義！ 地球万歳！

列席者の大半 (一斉に立ち上がり挙手したまま) 地球万歳！ 地球万歳！ 地球万歳！ (と連呼)

<sup>20</sup> 後の木星共和国 (The Jovian Republic) の前身はアメリカ、ロシア、アルゼンチンやチリ、中国など地球各国が木星に設けた宇宙港やハビタットであるが、本作品では BF 時代の木星全体を便宜上「木星圏」と総称する。”The Founding of The Republic,” *Eclipse Phase: Rimward*, 2012, p.33.

<sup>21</sup> なお本作品のケントのようなエリート官僚の先行事例としては、日本帝国期の松岡洋右がある。外務大臣に昇進した彼の性格は、「うぬぼれといえるほどの際立った自信家であり、自分は千年先、二千年先まで見通していると豪語していた。……会議のほとんどを松岡ひとりでしゃべり、近衛 (当時の内閣総理大臣；引用者注) の発言などまったくに等しい。グルー大使 (駐日アメリカ大使；引用者注) は「松岡と話す、その九五パーセントを彼がしゃべる」と述べている」。なお同時期の対日政策に関与したアメリカ国務省政治顧問 S・K・ホーンバックもまた「自分の考えに絶対誤りはないという大変な自信をもっていたようである」「自分の考えに合っているものは高く評価するが、合わないものはまったく顧みず、あるいはこれを批判するという傲慢さである」。須藤真志『ハル・ノートを書いた男—日米開戦外交と「雪」作戦』(文藝春秋、1999年) pp.38-39, pp.63-65.



ハウエル 我慢だ、我慢。

アリスター アイツ、何様のつもりなんです？ まるで帝王みたいに威張って。

ハウエル 君も承知のことだと思うが、形式上の位階はさておき、国際機関の職員は  
大なり小なり出身母体のヒモ付きとして、互いを牽制しあっているのだよ\*22。さ  
すがに彼と事務総長ほどの力の差はレアケースだがね。

アリスター それは自国の力をかさにきて他人を圧伏していい理由にはなりません。

ハウエル うむ、そうだな。他山の石とすべき例だな。

(ケント、高らかとガッツポーズ。地球人ら、拍手)

ケント さて、皆さん、日ごろ奮戦力闘される皆さんのために、今日は特別レセプションを用意しました。盛りだくさんの宴会だよ～！……

アリスター 力闘、力闘？ お前らがどこで戦った。(と小声で憤って) 質問があります。(と挙手)

ハウエル よしたまえ、大佐。(とアリスターの手をつかむが、立体映像なのですり抜け)

ケント ……めったにお目にかかれない珍味、あといろいろお楽しみとかね……。

(列席する地球人の面々、大いに笑いはしゃぐ)

アリスター 質問があります！ (と立体映像が立ち上がる)

ハウエル 無駄だ。彼らには聴く耳がない。(とウンザリ)

ケント ……でね、ご気分のすぐれない方は、防音効果バツグンの個室で、選りすぐりの美女ナースがすばらしいマッサージ・テクを提供するから、ストレス思いっきり発散しちゃってください。余計な業務は平民階級に任せて、ボクらは人生を享受しないとね。でしょ、皆さん！ (とケント笑う。周囲の人々も笑う)

### 《 未来世界の会議場 》



(The image is quoted from "Politics and Power", *Eclipse Phase Rulebook 3rd Edition* (Posthuman Studios LLC., 2011), p.55)

<http://eclipsephase.com/releases>

\*22 事例についてあえて提示すれば、明石康、木村元彦 (インタビュー・解説) 『「独裁者」との交渉術』 (集英社、2010年) pp.223-224 において、「(国連の) 日本政府代表の場合は「国益」というものも重視しなければいけないわけですね」という質問に対して、明石の回答「はい、それは当然です」というもの。あるいは元経済産業省政務秘書官の岸博幸『ネット帝国主義と日本の敗北 搾取されるカネと文化』 (幻冬舎、2010年) の pp.110-111 で示された、国際協力の業務的教訓として曰く、「もしあなたやあなたの企業が米国に目を付けられたら、あなたが米国のネット企業のサーバーに預けている情報は決して安全でないと考えるべきです」。



アリスター タイタンのアリスター大佐サマは、ご質問があるんだと、申し上げてんだよ！ このアメ公の白ブタ野郎！（と議事場の全スピーカーから大音量で）

ケント （顔をしかめ）なーんだ、タイタン人か。ああ、イケメンの男性ナース、待機していますよ。（とケントおよび周囲の人々が笑う）そうか、アンタ、エゴ（人格）データのみの参加だったね。残念、ザ・ン・ネ・ン！（とまた笑い）

アリスター こんな作戦計画なんて、失敗するぞ！

ケント なに言ってんの、この田舎のバカ女？ ウザっ！ この作戦プランはね、地球最高の天才ボク様がね、エートね、えーとハイパー電脳で計算した……。

アリスター 間違っている物は間違っている。こんな作戦では全滅するぞ！

ケント はあ？ なに今さら？ おい、ハウエル、田舎者のくせに合衆国に逆らうの？

アリスター 大使。これは最後の外交的チャンスですよ\*23。（と小声でハウエルに）

ハウエル それは確かだな。よし大佐、ここは任せろ。（と立ち上がる）

（ハウエル、ケントと向き合う）

ハウエル お訊ねになられたので、喜んでお答えしましょう、国連高等弁務官。（と「国連」を強調する）わしはタイタン政府を代表してこのダン＝アリスター大佐の専門的知見を当会議にて聴納することを申請します。大佐は半年間ティターンズと戦い、その実戦経験の豊富さは明らかです。彼女の知見は各国代表にとって必ずや有益であると確信いたします。

ケント あ？ なに言ってんの？ コイツら、キモくね？（と肩をすくめ）

ハウエル 事務総長。（と国連事務総長の方を向き）本日の総長はまだ特段のご発言をなされておられません、もはや会議は決したとお考えですか。

国連事務総長 ウ、ウム。そ、そうだな。議決はすでになされたわけだし……。

ハウエル 総長。我がタイタンは未だ投票権を行使しておりません。従って会議は終わっておりません。もちろん総長ご自身が、我が国に投票をお許しにならないまま会議の終了を宣言されるなら、どうぞご随意に。ただしその場合、我がタイタンはもはや国連のメンバーとして正当に扱われてはいないと認識し、やむなき処置に出ざるをえません。さて我が国の発言に対し、国連のご返答やいかに？

（しばし沈黙が続く。ケント、冷やかな形相で総長をにらむ。ハウエル、同じく総長をにらむ）

国連事務総長 ウ、そうだな。ではそれでは、だ、ああ、ケント君。キ、君はどう……。

（とそこで「木星圏」のブースにいる人物が挙手する。外見は四〇歳ほどか、背の高い黒人女性）

ニャン特使 総長。よろしいでしょうか。

国連事務総長 ウ、なにかね、ニャン特使\*24。

\*23 国家外交を動かす因子は、合理論やプラグマティズムよりも、次の三点と要約であるとされる。「国際関係が「合理的行為者モデル」を前提としては、かならずしも充分説明しえないこと。また、物質的な「利害 (interests)」だけが、かならずしも外交政策の変更をもたらすわけではないこと。さらに、冷戦の終了など国際環境の変化が、かならずしも外交政策の変更をもたらすわけではないこと。これら三つのことを敢えて一言で要約すると、政策決定者は生身の人間である。政策決定者は、感情をもち、面子を重んじ、惰性の影響をうける存在である」。木村汎『新版 日露国境交渉史—北方領土返還への道』(角川文庫、2006年) p.280。



ニャン特使 この度のタイタンのなされようは礼を失する不規則行為です。聡明なる総長閣下でさえ戸惑われるのは当然のことかと。この私もまた当惑しておりますわ。

国連事務総長 ウ、ウム。そうだ、そうなのだよ、君。わかってくれて大変嬉しい。

ニャン特使 とは言いまして、いったい土星の方々が事態をどのようにお考えなのか、良き隣人である私ども木星の住民にも興味がありますわ。それがたとえ瑣末な事柄に過ぎないとしてもです。

(ニャンの「良き隣人」という言葉を聞いて、アリストアとハウエル、呆れ顔で苦笑する)

アリストア どこか一国は釣り針に引っかかるだろうと賭けましたが……。(と小声でハウエルに)

ハウエル ……まさか木星とはな。さて吉と出るか、凶と出るか。(と小声でアリストアに)

(議場の面々、騒ぎだす)

国連事務総長 ソ、ソ、それでは、どうすればいいと……。

ケント 待ちなよ、木星特使。さっきアンタ、手、挙げたでしょ。くだらないこと言っ  
て、誠意ってのないよ、わかる？ セイイ！ セ・イ・イ！！

ニャン特使 とんでもございません。木星圏は地球に忠実な植民地。常に母なる星を敬慕  
い、誠実に物資を供給し、各国の債券を引き受けておりますわ。ただ……。

ケント ただ、何だよ。はやく言いな！ 早く早く！ ハ・ヤ・ク！！

ニャン特使 ただ、どうでしょう。ここは手短に済ませるという条件で、このアリストア大  
佐なるお方のご意見を伺うことにしては。あくまで参考意見ということで。

ケント アンタ、話長いよ！ あとね、そんなこと聞いてないよ。ほんとバカだねー！

(アリストアとハウエル、小声で密談)

アリストア あの木星特使の態度は意外ですね。てっきりケントに迎合するのかと思ってい  
ましたが。

ハウエル 確かにニャン女史は木星圏を実効支配した合衆国の面々とも親密だが、他にも  
色々な噂が付きまどっておる。

アリストア (さらに小声で) 噂って、どんな噂です？

ハウエル (さらに小声で) じつは木星の独立運動グループに資金援助しておる、とかな。

アリストア 彼女のプロフィールは読みました。コンゴ出身でハーバード大卒、やり手の  
投資家でしょう？ かなり現実主義的な人間という印象を受けたのですが。

ハウエル そうだ。木星の入植ブームに乗って成功した起業家の一人だな。木星圏の臨時  
代理として国連に派遣されたのは本人の希望なのだろう。

アリストア 財界の新進エリートが、なぜこの時局で政界入りを目指すのですか？

ハウエル 良い質問だ。その答えを君だけでなく、各国外交団も知りがあっておるよ。

(ニャン、滑らかな口調で話し続ける)

\*24 本作品でのニャン木星特使の立場は、台湾の「台北駐日経済文化代表処」またはカナダ・ケベック州の「ケベック州政府在日事務所」の責任者に類似した准国家的団体の外交官と見なす。



ニャン特使 まさか、高等弁務官殿。あくまで、このお勇ましい方のご意見をお聞きしたい、それだけですわ。純粋な興味本位から、とでも申し上げましょうか。

ケント あのね、そーいう話じゃないから。時間の無駄、ム・ダ！ 以上、終了～！！

ニャン特使 ええ。そういうお考えもありえるでしょうね。では、そう、いかがでしょう。タ  
イタンの大佐のお話を伺いたい方だけ、会議場に残るというのでは。

ケント バカだねー、バカ女、付き合いきれないね！ さ、行こ。そうだな、総長。

国連事務総長 ウ、ウム、では宴会場に……。

(とそこで「エクストロピア」のブースにいる人物が立ちあがる。外見は五〇歳ほどか、太った男性)

### エクストロピア大使 (以下エ大使)

よろしいでっしゃろか、総長。それやったら、小惑星エクストロピア (Extropia) を代表して、わいは残るんや。わいら商人国家は儲け話にやかましいでっせ！\*25

列席者 ほう、では我がハビタットも。

では私らも。(と続々)

ケント ナンセンスだ！ くだらないねー！ みんな、ついて来なよ！！

ニャン特使 まあ、そう急がれずとも。では残られる方々は挙手をどうぞ……。

(一人、二人……とあちこちの各国代表が手を挙げる)

ニャン特使 いかがです、事務総長。彼女の話を書いたがっている国がこんなにいます。

国連事務総長 オ、オウ、そうだな。どうかね、ケント君。

ケント おい、アンタら、ふざけるんじゃないよ！ この愚民……。

(と、そこで「アメリカ合衆国」のブースにいる初老の人物もまた手を挙げる。それを見て、地球各国代表も挙手)

ケント ちっ……ジジイが……五分だけだ。早くすませな。(とニャンをにらみ)

(全員、改めて着席する)

ハウエル というわけだ、大佐。思い切り場を荒らせ。が、引き際を心得ろ。(と小声で)

アリスター ありがとうございます、大使。(とハウエルへ) 木星人、何のつもりだ？ (と小声で)

(アリスターの立体映像、円卓の中央に出る。彼女の画像はその足もとにある直径三〇センチほどの金属の球から投影されている。ちょうど立体映像の「目」の辺りに、球から延びた棒状の先端にあるカメラのようなものがある\*26。金属球はそのまま転がって中央に鎮座し、アリスターの姿を投影している)

アリスター 皆さん、もはや社交辞令で時間を空費する余地は残されていません。はっきり申し上げます。ここにいる全員がとうに承知している通り、人類は滅亡の危機にあります。現状の戦略では壊滅を避けられません。

(議場ざわめく)

\*25 エクストロピアの政治体制については *Rimward*, p.22.

\*26 この"potable server"については、"PLAYING CHARACTERS." Homepage | Eclipse Phase: Retrieved July 22, 2013 ( [http://eclipsephase.com/downloads/transhumanplaytest\\_PlayingCharsRulesOnly\\_July7th.pdf](http://eclipsephase.com/downloads/transhumanplaytest_PlayingCharsRulesOnly_July7th.pdf) ) p.13.



**アリスター** **しかし**ケント氏の提案が無意味だと申し上げているのではありません。兵力の集中運用、攻勢作戦、もったものことです。ですが問題はそれが誤ったやり方でなされようとしていることであり、本官はその改善案を提示したいのです。どうか、ご静粛をお願いします。

(議場、静まる)

**アリスター** 改善案を説明する前に、何が、なぜ誤っているのかを説明しましょう。それは皆さん、ティターズが論理的、それも愚直なまでの論理的思考に基づいて行動していることに起因しています。あらかじめ申し上げておきますが、突然の開戦より半年が経過した今、マスコミが報道するような彼らが恐るべき超知性体だという見解、それは完全に誤っていることが明らかとなりました。戦略思考という点のみで評価する限り、ティターズは士官学校を卒業したての新米レベルでしかありません。それは本官を始めとする多くの前線指揮官が戦場で彼らの部隊を撃破してきたことから明白です。

(ひと息の間)

**アリスター** 皆さん、あえてこう申しますが、ティターズがどの国に開発されたか、なぜティターズが人類を敵と見なしたのか、いつからメッシュ・ネットワークを中継して各国の兵器システムを掌握しだしたか、本官にはわかりません。おそらくこれは戦後の、もし戦後があればですが、研究課題でしょうし、かつそうすべきです。ですが不可知論に属するであろうテーマは脇に置くとして、まず軍人として、そしてコンピュータ開発史の博士号取得者として断言できるのは、ティターズには政治の素養がないという点です。この点はすぐご説明しましょう。

(ひと息の間)

**アリスター** そうなのです。彼らには、目先のデータのみを因数として、固定的思考パターンに基づき行動する、それ以上の知的能力はないのです。極論すれば、ティターズの行動パターンは直近の戦場における彼我の兵力比に依拠しており……大まかに言えば、自分と敵との比率が三対一であれば攻撃し、一対一では防御し、一対三であれば撤退して隣接する戦域に向かう。そして自らがあまりに優勢なら余剰兵力を他の戦域に派出する、その程度の判断力でしょうか。ティターズの知性とはせいぜいそんな物なのです。ここまで、ご質問をどうぞ？

(ニャン、挙手して立ち上がる)

**ニャン特使** では失礼ながら口をはさみますが、貴官のご判断自体が妥当でしょうか。なんと申してもティターズは圧倒的優勢です。貴重な時間を費やして討議を続けるより、すぐ攻撃を行って主導権を取り戻す方が有益ではありませんか？

(アリスター、一礼して答える)



**アリストター** 木星特使、御発言ありがとうございます。御指摘には一理ありますが、その前に特使の目から見て、ティターンズ<sup>すがたかたち</sup>の現状はどのような姿形をしているのか、お話しできませんか？

**ニャン特使** 私の目から……現状？ それはどのような意味でしょうか？

**アリストター** それはこういうことです。いま本官たちは人類存亡をかけた戦略会議の場にいます。この場において参加者の知る事実<sup>まこと</sup>に齟齬<sup>そご</sup>があることは、すなわち人類滅亡につながりかねません。また本会議の参加者のなかでも、特にニャン特使、貴方は、アフリカ、アメリカを始めとする地球各地だけでなく小惑星帯や木星まで実見され、広い御見識をお持ちですね。そこで経済にも御詳しい貴方にこそ現在の太陽系やティターンズに関する御考えをうかがいたいのです。

(アリストター、ニャンに一礼する。ハウエル、無言でニヤリと笑い、ニャン、アリストターをにらみつける)

**ニャン特使** そうですか、そうですね (とチョットためらって) ……緒戦からティターンズは快進撃<sup>しんげき</sup>でした。人類の戦艦や砲台は次々に乗っ取られ、地球だけでなく火星、小惑星帯にさえ彼らの基地があり、しかもステルス技術を用いた神出鬼没なその活動によって彼らの全貌<sup>ぜんぼう</sup>はつかめずにいます。現にすぐそのラグランジュ点にいる敵の戦力さえ、よくわからず仕舞いではありませんか。こんな敵にどう対処するのか、やはり即時<sup>そくじ</sup>の攻撃あるのみでは？ (とハウエルをにらむ)

**アリストター** 木星特使、御指摘ありがとうございます。貴方の敵情分析には同感です。要するにティターンズは太陽系の制宙権<sup>せいしゅうけん</sup>を掌握しつつあります。しかしここでアメリカ海軍大学の二代目校長にして、海軍戦略研究の「父」というべきアルフレッド・マハン提督<sup>ていとく</sup>に本官の弁護<sup>べんご</sup>をお願いしましょう。彼は言っています。「制海とは、敵の単独行動の艦船も小さな戦隊もひそかに港から脱出することができないとか、使用される頻度の多少にかかわらず大洋上の航路を横切ることができないとか、長い海岸線上の無防備の地点に対して敵を悩ますような襲撃を加えることができないとか、封鎖された港湾<sup>こうわん</sup>に入ることができないということを意味するものではない。」「このような回避行動<sup>かいひこうどう</sup>は弱者の側も、いかに海軍力が劣勢であってもある程度は可能であることを歴史は示している。」と\*27。つまり劣勢である本官ら人類にも、やみくもな攻撃以外の「回避行動」が選択可能なのです。

**ニャン特使** 回避行動……その「回避行動」とは、逃げるチャンスという意味ですか？

**アリストター** ローコストで生き残るチャンスがある、という意味です。まして人類側は、これから解説するように、必ずしも完全な劣勢ではありません。従って本官らがこの討議を通じて「回避行動」または勝利のための最適解<sup>さいてきかい</sup>を見つけ出すことは、明らかに有益な行為となります。そう思われませんか、ニャン特使？

**ニャン特使** よくわかりませんが……では貴官のご意見を謹んで拝聴します。(と座る)

(アリストター、ニャンに一礼して)

**アリストター** さて先ほどのニャン特使が敵情を端的にまとめてくださったので、それを引

\*27 アルフレッド・セイヤー・マハン、北村謙一訳『海上権力史論』原書房、1982年、p.24.



き継いでお話ししましょう。なるほど、「緒戦からティターンズは快進撃」。その通りです。その進撃はめざましいものでした。ええ、進撃「だけ」は。ですがその快進撃を遂げた彼らによって、どこでも構いませんが、完全に制圧された惑星が存在しますか、特使？ いったい彼らの策源 (Depot) はどこにあるのでしょうか？

(ニャン、考え込む)

ニャン特使 策源……その「策源」とは何ですか？

アリスター 本官のいう「策源」とは、軍事力に対してエネルギーと軍需品の両方を補充する供給地のことです\*28。

ニャン特使 そうですか、策源……とはいえ彼らのゲリラ作戦は活発だとか。各国の電腦制御兵器はかなり奪われてしまったそうです。おかげで私ども木星も急いで武装化を強いられる始末。さすがに今は対策が進んでいるという話ですが。

(アリスター、うなづいて言う)

アリスター そうです、特使。まさに貴方はポイントを突かれた。そこが肝心な所なのです。ティターンズのゲリラ作戦には各国ともさんざん翻弄されてきました。しかしゲリラは安定した根拠地なくして最終的には成功しません。時間が経てばたつほど相手はゲリラ戦法に慣れて反撃に転じるからです。本官たちが慣れつつあるように。ですからゲリラ側は確固たる策源を確立し、敵を消耗させながら自らを補充する戦いを行う。この主導権確保の努力こそゲリラ勝利の秘訣、ということではゲリラ戦の名手・毛沢東が説いたことです。そこでお聞きします、特使。ティターンズはどこに策源を建設したのですか？ 資源セクターを絨毯爆撃しておきながら、どうやって物資を補充し、補給ラインを再開するのでしょうか？

ニャン特使 なるほど、強大な艦隊を抱えているからには、そうですね、どこかにそういう軍隊を支える施設があつておかしくないかもしれませんが……私は軍事にうといのですが、本当に存在しないのですか？ 証拠はありますか？

アリスター 国連軍のデータベースに漏れない限り、そのような大規模施設の建設は確認されていません。せいぜい戦前の設備の流用です。ですよね、ケント高等弁務官。

ケント フン。(と無視)

ニャン特使 ですが、どうでしょう。現代ではナノテク万能合成機があります。ティターンズがあれを入手しているのは間違いでしょうから、工場や資源セクターはいらないはずですが。スクラップを再合成してロボットや軍艦を建造し、その電腦にA Iエゴデータをインストールすれば即席の軍隊が出来上がるのですし。

アリスター ええ、そのやり方は正しいのです、短期的には。ただ二つの落とし穴があります。

ニャン特使 何でしょうか？ その落とし穴というのは？

アリスター 一つには、合成機といえども大命題「質量保存の法則」「エネルギー保存の法則」からは逃れられません。あれは、あくまで投入された分子を寄せ集めて製

\*28 「そもそも軍隊が作戦行動を起すや、それが敵軍を敵国に置いて攻撃する場合であれ、自国の国境で敵軍を迎え撃つ場合であれ、常にその軍隊の糧食、武器を補充する供給地に依存せざるを得ず、またこれと密接な連絡を保っていなければならない」。クラウドヴィッツ、清水訳『戦争論 (上)』「第5部第15章 策源」p.536。



品へと再合成するリサイクル装置です。彼らはどこからリサイクルに要する莫大な電力を得るのですか？ 広大な太陽電池パネルでなければ無尽蔵のヘリウム・タンクにつながった核融合炉でもない限り、合成機に頼りすぎる長期戦は自らの手足を食って腹を満たしているのです。エネルギーコストの観点から言えば、たとえば重金属は再合成より採掘ですと安価に入手できることは、経済を御専門とされる特使がよく御承知でしょう。これが一点目です。

ニャン特使 それで二点目というのは？

アリスター ニャン特使、御存知とは思いますが、いまだAIテクノロジーは発展途上の分野です。AI戦闘ポッドの技能はベテラン兵士のそれにまだ及びません。確かに数は力ですが、数量だけが勝敗のファクターではありません。李舜臣、ネルソン、スプルーアンスといった知将達がそれを実証しています。皆さん、本官はコンピュータ開発の史学研究者として話しますが、AIの兵士が老練な人間の兵士と互角の条件で戦う時、さほど有利とはいえません。よって「AIイコール優秀な兵士」という考えには、専門家として納得できないのです。

(エクストロピア大使 [以下「エ大使」、立ち上がって口を挟む])

エ大使 ちびつとばかしええやろか、大佐。いや、あんたの説明、筋は通つとる。せやけど、するとティターズズのトンマ野郎は何考えとる？ 連中はわいらを滅ぼそうと、一応そいつが連中の狙いやつとして、生産やら経済ろくにへんのにわいらを倒せるって本気で思つとるのやろか？ そんな単純なオツムか、アイツら？

アリスター 呆れるほど正しくその通りなのです、大使。お忘れですか、なにしろティターズズの正式な自称は「総合情報……」。

エ大使 ああと「……戦術知覚体」(Total Information Tactical Awareness NetworkS) やった。連中、確かに言うておった。要はナニかい、アイツら戦術とか目先の計算とか、そんなんしか出来へんのか。わいら、そないなのに負けとったのか。まいったなあ。

(アリスター、大きくうなづく)

アリスター そうなのです。本官たちは奇妙な過大評価を妄想していたのです。皆様をご存知のように、ティターズズAIの電腦は各地で鹵獲され、厳重な管理下で分析されているわけですが、その解析結果は一様に思考パターンの限定性を示唆しています。ティターズズの知性に関する過大評価は、彼らの緒戦における奇襲の見事さ、彼らの比較的優れた戦術能力によって引き起こされた、つまり未知の脅威に対する本官たち人類の恐怖から派生していると言い切つてかまわないでしょう。人類は自らの恐怖心を恐れていると言えるわけです。

エ大使 そうやろか？ ほな鏡を見とるようなもんや。そないいうことかな？

アリスター 別の表現が許されるならば「神話」の創出でしょうか。

エ大使 なんやねん、その「神話」って？ おとぎ話ちゅうこっちゃでっしゃろか？

アリスター まさにその通りなのです、大使。史学的にいえば、神話やおとぎ話の一部は、狡猾な権力者あるいは学識のない人々によって歴史の事実が歪められ、感傷的に



語られていった成れの果てなのです。ちょうど第二次世界大戦において、ナチスドイツの戦車軍団が西ではフランスを電撃的に打倒し、東ではモスクワへと肉薄したことで、実際にはその勝利がギャンブル的の際どい物であったにもかかわらず、後世の人々のあいだでドイツ軍最強神話が広まったように。例えば考えてみてください。ある兵士がティターンズに敗れたとして、敗因を他人に責められたとしたら、その時は自らの弱さを理由とすのでしょうか。それともティターンズの超絶な強さを理由とすのでしょうか。軍事裁判の場で、あるいは酒場や友人たちとの漫談の場で、どれだけの兵士が真実を告白すのでしょうか。

**エ大使** なーるほど。そりゃそないや。政治家かて、選挙で落ちるの、そらオノレに人氣がへんからや、ちゅう風に本気で反省やることなんてめったにへんな。

**アリスター** というわけです。なるほど、一部の有識者なる方々によれば、どこかにティターンズの真の司令部があり、そこで驚異の戦略が練られているから、人類もまた、とある政府の一元的指導下で団結しなければならないのだそうです。ティターンズに総司令部があるという物証など、どこにあるのですか？ オッカムの定理的に事実を整理すれば、そもそも司令部など無い、ティターンズは目先のことを追いつける戦闘マニアの寄せ集めである、という結論に行き着くのです。

**エ大使** ははあ、なるほど。いや、姐さん、説明どうもおおきに。

(ニャン、首をかしげる)

**ニャン特使** ちょっとよろしいでしょうか。貴官のご解説が仮に正しいとしましょう。ですがティターンズの知性がそれほど低レベルだとしたら、なぜ爆撃だの奇襲だの、そういう戦いで成果をあげているのですか？ なぜ都市や工場まで攻撃するのですか？ 無能な知性と赫々たる戦果、論理的に整合しないではありませんか？

(アリスター、またもニャンに一礼)

**アリスター** 特使。これは誤解しないでいただきたいのですが、ティターンズは真の意味での愚物ではありません。誤解をおそれず要約しますと、ティターンズは戦術という「戦闘のやり方」つまり戦うスキルは秀逸なのに、ただ戦略という「戦闘の使い方」すなわち戦争全体のプランニングとなると全くお粗末なのです。クラウドゼヴィッツ風に言うなら\*29。

**ニャン特使** 戦闘の「やり方」と「使い方」？ どういうことでしょうか？

**アリスター** こういふことです。本官たち人類の社会では、ただ戦争したいから、などと突然思い立って戦うことは本質的にありえません。まず戦争事由があり、それに沿った目標達成の手段として戦闘が行われます。この流れを計画として組み立てて実行する一連の知的活動が戦略です。しかし戦闘には一定の作法があり、それに沿って戦うと勝ちやすくなります。これが戦術です。例えばクッキングを考え

\*29 「戦術とは一戦闘中における戦闘力使用の学問であり、戦略とは戦争目的遂行のために数戦闘を使用する学問である」。クラウドゼヴィッツ、清水訳『戦争論 (上)』「第2部第1章」p.147。



てください。失礼ですが、特使、あなたは料理の御経験がおありですか？

ニャン特使 要点をどうぞ、大佐。

アリスター 人は空腹ですと食欲がわきます。そこで作るか、買うか、とにかく食事を準備します。その全体が戦略です。しかし作るには作り方があり、買うならメニューがあります。どれを選ぶか、これは戦術です。ヒトは日常生活を通じて、この二つを学びます。これは外交にも当てはまることと思いますが、いかがです、特使？

ニャン特使 比喩は了解しました。それで？

アリスター ティターンズに学びの日常生活はありません。彼らは戦うことに特化したAI、いいえ、ただの戦闘マニアです。あえて言えば、彼らは空腹であろうが無かろうが、ひたすら料理を作り買い続けるのです。建設的目的などありません。彼らが人類の軍隊、コロニー、生産施設を襲うのは、そうしろとプログラムされたからでしょう。だからこそ効率的なのです、手持ちの資源を使い尽くすまで攻撃をやめない。資源がなくなったら他の土地に移り、そこの資源を使い尽くして戦う。この「武装遊牧民」戦略に従って\*30、AIは太陽系の征服者になりかけています。ティターンズが優勢で人類が劣勢なのは、彼らは明日を考えず資源を浪費し、本官たちは明日を省みて資源を節約しつつ戦わねばならないからです。

エ大使 ほー、やるってこういうこっけか。やからは鉄砲玉覚悟で突っ込む。わいらは命惜しさにビビっとる。ギャングの撃ち合いやがな、ほな。

アリスター はい、ご指摘はおおむね正しいかと。なお、かのクラゼヴィッツによれば「政治は頭脳、軍事は手足。手足が頭脳を操るなどあってはならない」\*31。しかしティターンズにはその「頭脳」がありません。彼らの「手足」は破壊という単一機能に特化しています。ティターンズの勝利とは、草木を食い尽くす無慈悲なイナゴの勝利です。後には何も残らず、ただ不毛な荒野が広がるのです。

## 《 イナゴの勝利 》



(This image is quoted from "Enter The Singularity...", *Eclipse Phase Rulebook* 3rd Edition (Posthuman Studios LLC., 2011), p.16) <http://eclipsephase.com/releases>

\*30 なお近代における「武装遊牧民」の凡例は 19 世紀の独仏戦争におけるプロイセン陸軍。マーチン・ファン・クレフェルト、佐藤佐三郎訳『補給戦一何が勝敗を決定するのか』中央公論新社,2006年,pp.166-176.

\*31 クラゼヴィッツ、清水訳『戦争論 (下)』中央公論新社,2001年,p.526.



エ大使 ふーん、ケッタイなヤツらや。まるでサルのオナニーやがな。

アリスター まあ、そうなのです、エクストロピア大使。(と苦笑し) 彼らの戦争目的は自己完結しているのです。ところでニャン特使、先ほど仰られましたね。ティターンズは爆撃や奇襲に長けていると。そう、戦術機動はうまいものです。当然でしょう。それしか知らないのですから。弱点を探り出す、電脳を乗っ取る、ステルス技術を駆使して奇襲攻撃を敢行する。すべて戦術上有利であると判断した結果の行動です。もちろん彼らとてミサイルを生産するでしょう。痛んだ装甲やエンジンを修理するでしょう。しかし憶えておられますか。ティターンズが決まって言う、あの間抜けな台詞のことを。「ティターンズはみんなの味方、平和の使者っ。お願い、降伏してください。抵抗は無駄ですよ…… (やや甲高い声で気取って)

エ大使 そら姐さん、いや大佐、忘れようにも無理やねん。そやろ、モレリアはん。

ニャン特使 少なくとも、あれを聞いて降伏しようとする人は多くないでしょうね。

エ大使 まずおらへんやろうわ。降伏したって、どのみち殺されてしまうわ。あれ無意味やろうな。

アリスター 大使、特使。まさにそうなのです。あれは完全に無意味です。ですがティターンズは、降伏勧告をプログラムされている以上、無意味であっても実行しないではいられないのです。プログラムされた通りの行動パターン、結局は小手先、小細工の域を出ない。それが柔軟性を欠いたマニア的A Iの限界なのです。

ニャン特使 では大佐。ティターンズの戦法について、もう一つ疑問が。あの彼らの行動の中でもひとときわ不可解な、あのエゴ(人格)データの強制アップロードはどうですか? なぜ戦術A Iが大量の人の記憶にあそこまで執着するのでしょうか。本当に何ら政治性がないのでしょうか?

アリスター 御指摘はもっともです。そして実証に乏しい以上、正解はティターンズ以外には誰にもわかりません。ですか完全に仮説の域を出ないということで御容赦いただけるなら、本官はこう考えています。もしもあれが何か政治の、つまり統治や将来の資産運営に関する行動だとするなら、ズサンの極みだと言う他ありません。何か別の策略なのでしょう。ですが事例について多数の報告がありますから、詳細は後ほど検討できます。それとも本官が知るかぎりの、最低約二〇TB(テラバイト)分のレポートを開陳すべきだと思われませんか、ニャン特使?

ニャン特使 先をどうぞ、大佐。

アリスター 了解しました。さて諸般の報告を総合的にみますと、ティターンズはいわばギャング的に、場当たりに資源やデータの安直な略奪をくり返している、としか言いようがありません。従ってエゴ(人格)データの強制アップロードに関しても、ティターンズの短絡思考の傍証ではないか、というのが本官の見解です。とはいえ全て推測です。新たな情報が見出されれば、喜んでこの仮説を修正しましょう。ただし戦局逆転のための新情報ですが、情報の収集にはまず能動的かつ計画的行動が欠かせません。たとえ不十分であろうと仮説を立て、それに基づいて計画し、実施して具体的な成果を出すことが求められているのです。

エ大使 そんなら、例えばこないな作戦はどうやろうか。わいらがみんなのエゴ(人



格) データをや、そや、どこぞ<sup>へんきょう</sup>辺境の基地にまとめてほっとく、連中それを狙って  
ホイホイ来る、そこをビシバシどつく。こないな計画うまくいくやろか？

アリスター 仰る通りです、大使。敵の偵察<sup>ていさつ</sup>をごまかし、味方にとって有利な場面に相手を  
誘い込んで決戦<sup>けっせん</sup>することこそ毛沢東<sup>マオズードン</sup>戦略の根本であり、まさに今の人類側が採るべき  
方針です。ですから再三に渡り、本官は戦力の結集<sup>けっしゅう</sup>を訴えているのです。

エ大使 なーるほど。こりゃ面白くなってきよったぞ。

(またも議場、ざわめく。あちこちから拍手があがる。そこでケント、立ち上がって冷ややかな声で言う)

ケント それだけ言えば、もう十分だろ。このバカ女！

(議場、静まり返る。アリスターとケント、互いをにらみ合う)

ケント とっくに五分を過ぎたよね。アンタ、発言時間すぎちゃって、どー責任とるつ  
もり？ 厳罰だよ、厳罰！ ちゃんと誠意見せなよ、誠意、セ・イ・イ！！ あとね、  
アンタ、究極のバカだね。ティターンズがバカなら、なんてボク様も誰も、それに  
気づかないわけ？ バカはねー、アンタ、ア・ン・タ！ ほんと平民<sup>へいみん</sup>の女ってバカだ  
ねえ。やっぱバカなんだね、コイツ。以上、終了〜。じゃ、メシ食いに……。

アリスター 御質問にお答えしましょう、高等弁務官。あくまで管見ながら、それは「誰  
も気づかない」のではなく「誰も気づこうとしなかった」のです。

(ケント、アリスターの発言を無視して席を離れる。地球各国の代表が彼の元に来る。彼らは悠然と出口に向かう)

ケント 明日の前に片付けときたいアレだけだし、それ、おたくに……。

アリスター 皆さん。どこの国であれ、科学史に登場する生粋<sup>きっすい</sup>のエリートは、往々にして  
優秀かつ未来志向の持ち主で、誇り高く、そして政治的理由にのっとして合理的  
正論<sup>せいろん</sup>を排斥<sup>はいせき</sup>する、それこそ科学だと確信してきました\*32。ちょうど今立ち去る  
暴君<sup>ぼうくん</sup>ケントとその忠実な廷臣<sup>ちゆうじん</sup>がそうであるように。

(ケント、振返る)

ケント ほんとウザいな、バカ女。ビンボー人のくせにさ。(と冷徹に)

アリスター おや、なにか聞こえましたか、高等弁務官？ 風の囁きですよ。(と同じく冷徹に)

(ケント、議事場出口かくに立ったまま。国連事務総長、おろおろ)

アリスター いいですか、皆さん。自らの優秀性<sup>ゆうしゅうせい</sup>を信じる高貴な人は、往々にして自らの  
限界<sup>げんかい</sup>を認めたがりません。しかもA I 研究はこの数十年以内のさらなる飛躍が約  
束されている分野<sup>ぶんや</sup>です。ある意味ではA I 研究者ほど、その分野の潜在性<sup>せんざいせい</sup>を高く  
評価<sup>ひょうか</sup>するのは当然<sup>とうぜん</sup>の帰結<sup>きけつ</sup>でしょう。それがティターンズに対する評価<sup>ひょうか</sup>まで歪めて

\*32 具体例としては、日本地質学を長らく(1950s-1970s)指導してきたとされる「地学団体研究会」が、ルイセンコ学説への信奉に加えて特定の人々への「にくしみ」「個人崇拜」を原動力に、欧米系のプレートテクトニクス説とその賛同者を排斥し、彼ら独自の「地向斜造山論」を擁護してきた、と言われる。経緯については、泊次郎『プレートテクトニクスの拒絶と受容 戦後日本の地球科学史』(東京大学出版会、2008年) pp.91-94、98-110 及び「第4章 「2つの科学」と地学団体研究会」を参照。



いないと誰にわかりましょうか？ 加えて学界でさえ、助成金を得るため、社会的認知度を高めるため、いささか自らの研究成果を喧伝しすぎる人がいます。これは本官が学んだタイタン自治大学もまた例外ではないのです。

(間)

**アリスター** もちろん具体的事例はここでは差し控えますが、ともあれティターズやA Iに関する評価の迷走は、それが一因にあるのは確かでしょう。科学が将来性に満ちていればいるほど、それに幻惑されて実情を見誤るのです。科学史を紐解けば、遺憾ながらそういう先例が山ほど見受けられます\*33。高等弁務官、あなたはA I研究をとりまく共時的・通時的動向をどれほどご存知ですか？

(ケント、引き返して円卓の中央に立つ。アリスターとケント、対峙する)

**ケント** バカ平民、またバカ言ってるよ。タイタンなんて、ド田舎の負け組のクズなんでしょ。アメリカ市民はね、お互い才能をね、切磋琢磨してるの！ わかる！？

**アリスター** ちなみに科学の発展における迷走を最初に追究した人物の一人は、トーマス＝クーン (Thomas Kuhn)。二〇世紀の、それもアメリカ合衆国の歴史家です\*34。

**ケント** そんなの聞いてないよ。歴史家？ 何それ？ 今日的意義あるの？ ア？\*35

**アリスター** そもそも今日的意義とは、人から与えられるのではなく、日々の暮らしの中で過去を振り返った末の気づきではありませんか。安易に歴史を否定する人は、とどのつまり歴史に照らしてやましい事があるから、それを否定するのです。

**ケント** バーカバーカ、歴史なんて意味なーし！ 大事なのは未来、ミ・ラ・イ！

**アリスター** そうでしょうか？ 歴史は未来へと引き継がれるのです、高等弁務官。貴国の歴史には一件の負債もなかったのですか？ 黒人奴隷は？ 大恐慌は？ ベトナム戦争は？ アブグレイブ強制収容所は？ さあ、貴国の未来、次はどんな負債が？

(アリスターとケント、にらみ合う。ニャン、手を挙げて発言する)

**ニャン特使** アリスター大佐。貴官の分析ですが、アフリカ出身の黒人として興味深く拝聴しました。御国はいかがでしょう？ (とエクストロピア大使に話をふる)

**エ大使** いやあ、やいぶ面白くなってきよった。ほんで姐さん、ぼちぼち本筋に入ってくれへんか。

**アリスター** こちらこそ、特使、大使、御二人のおかげで論点をだいたい整理できました。ありがとうございます。(と二人に頭を深々と下げ) では話を元に戻して、「不朽の正義」作戦の問題点および改善案を提示したいと思います。

**ニャン特使** その前に一旦休憩にしてはどうです？ ここで頭の整理をいたしませんか。

\*33 なお 21 世紀現代の政治学、経済学、歴史学等において、人間とは「完全合理」ではなく、その「限定合理」に制約されて不回避的に錯誤をおかす性質があるという考えは、すでに定説といってよい。この点で先駆だったのはその研究によってノーベル賞を得たハーバート・サイモン、佐々木恒男、吉原正彦共訳『意思決定と合理性』文真堂、1987 年。

\*34 『科学革命の構造』<http://www.amazon.co.jp/dp/4622016672>

\*35 外交交渉において世界史に関する広範な知識が有用であることは、毛沢東、キッシンジャーらが第二次世界大戦におけるドイツとイギリスの戦略を議論しつつ、冷戦期の情勢と比較検討している点等からもうかがえる。ウィリアム＝バー、鈴木主税・浅岡政子共訳『キッシンジャー「最高機密」会話録』(毎日新聞社、1999 年) pp.130-133。



アリストアー 本官には異存ありませんが、どうしましょうか、ハウエル大使？  
ハウエル 結構かと。皆様、事務総長、いかがですか？  
国連事務総長 ウ、ウウ、ド、どうするかね、ケント君？  
ケント 閉会。もう死ね！これ、合衆国の命令、メ・イ・レ・イ！！（と怒気を示し）  
国連事務総長 ウ、そうか、では閉会を……。

（アリストアー、エクストロピア大使、ハウエル、ニャンら、総長をじーっと見つめる）

国連事務総長 イ、いや、まずは休憩にしよう。ド、どうかな？（とケントにおずおずと）  
ケント 休憩って、なんだソリヤ!?（と周囲の面々を見渡し）……この愚民ど……。

（とそこで、列席の中から一人の初老男性が立ち上がる。彼の席にあるプレートには「アメリカ合衆国大使」とある）

アメリカ大使 我が国は休憩に賛成しませんぞ。他の方々もアメリカンコーヒーでブレイクされてはいかがですか？（それを聞いたケントは怒って議事場を出ていく）  
列席者 おお、それなら我々も休憩します。（とケントが出ていくのを横目に）  
ではわたし達も。  
国連事務総長 デ、では諸君、シ、しばらく休憩とする。（とほっとして）

## 第四幕第三場

### 註

巧妙な外交は悪辣な外交とはちがう。契約や条約を破って利得をおさめることは、余りにも明白に大義名分を失うことであるからマイナスが大きすぎる。また、それは他人に反撃の正当性を与える。だから、巧妙な外交をおこなうものは、契約を破ったりは滅多にしないものなのである。ヴェネツィアの外交の巧みさを語るとき、それを低俗な意味で理解しないことが必要であろう。大体、小賢しい策略で成功はおさめえない。

— 高坂正堯『文明が衰亡するとき』（1981）

<http://www.amazon.co.jp/dp/4106002213>

（場面は第二幕と同じ会議場。一同は立ったり座ったり、三々五々に集まっては話をしたり、仮眠をとっている者あり）

アメリカ大使 ご休息中のところを失礼するよ、タイタン大使。（と呼びかける）  
ハウエル これはこれは、先ほどはどうも、アメリカ大使。（と答礼）  
アメリカ大使 先だつての同国人の態度について、詫びを申し上げようと思ってね。  
ハウエル できれば当の御本人のお口からお聞きしたかったですな。  
アメリカ大使 そうもいかなのさ。なにしろ国防長官が彼を甘やかしている。親バカでね。  
ハウエル 非礼を承知で申し上げますが、そちらの外交方針はどうも解せませんな。



アメリカ大使 我が大統領閣下は、国際親善もさりながら、国内世論を大変憂慮されている\*36。  
ハウエル といいますと？

アメリカ大使 中間選挙が迫っているのに、世論調査の結果がどうもね。だから政治的に有力なケントの一族を味方陣営に留めておきたいのさ。対立候補でも立てられた日には党が割れかねない\*37。(と乾いた笑い)

ハウエル 残念ながら、すでにお分かりかと思いますが、開票の頃には地球はもはや……。

アメリカ大使 ……ああ、これでも本職はホワイトハウスにさんざん進言したのだよ。しかし合衆国の指導者は「民意」を尊重せねばならん、戦時中であれ\*38。

ハウエル にしてもケント氏の猪突ぶりは、戦争指導上、かえってマイナスでしょう。

アメリカ大使 あれでも抑制されている方だよ。他人に尻拭いしてもらうことに慣れている無責任セレブはたちが悪い。おまけに三〇歳のヤンチャ盛りでね。親以上に赫々たる功名を挙げようと熱心なのさ。ところで貴殿と大佐の間柄はどうかね？

ハウエル うちのアリスターはよくやっています。

アメリカ大使 羨ましい。ま、それはさておき、こういう国際問題を正面突破で打開するのが徒労に終わりがちなのは、互いに知っての通りだ。でどうかな、ヤンチャな高等弁務官はバイパスして、こちらは貴国の知見を参考とするよう大統領に談判してみる。そちらは我が国の体面に配慮した説明を、大佐に指示してくれないか。信じてくれ、我がアメリカとて世界の恒久平和を望んでいるのだ\*39。

ハウエル 貴国民は、我が国の「技術社会主義」路線との協調を歓迎しないのでは？

アメリカ大使 かつて毛沢東はキッシンジャーに向かってこう言ったそうだ、「そちらは、共産主義者、消え失せろ、と言う。こちらも、帝国主義者どもめ、消え失せろ、と言う。ときには、そういう言葉を口にすることもあります」とね\*40。我々が共に戦争を生き抜けば、罵り合う余裕も生まれてくるだろう。お遊びは戦後さ。

(とそこで柔らかなチャイムの音。人々は席に戻っていく)

ハウエル 善処しましょう。(とうなづく)

アメリカ大使 よかった。ではまた後で。(と席に戻る)

(少し時間がたって、みな円卓に座っている。ただアリスターとケントだけが円卓の中央の演壇に並んで立つ)

\*36 現代戦略学の基本概念として、国家戦略(=政策と同義)形成の主要素は「戦略環境」(=対外関係)「国内要因」「時代精神」の三点であり、それぞれの相互作用の結果として戦略が決定されるとされる。石津朋之「戦略を考える三つの視点—第一次世界大戦前夜の事例を中心に」国際安全保障学会編「国際安全保障」(第33巻第2号、2005年9月)を参照。

\*37 外交官は、しばしば自国のマイナス点をあえて他国に伝えることで、相手側の出方を見ることが少なくない。事例としては1973年11月12日の北京における毛沢東・周恩来とキッシンジャーらの会談。この席で毛沢東がウォーターゲート事件の外交的影響を懸念したのに対し、キッシンジャーはアメリカ国内の反ニクソン派のことを「彼らはみな、自分たちが国を動かしているのだと思いたいのです。それで、彼らは一日おきに交代でニクソン大統領を茶化します……重要なことはすべて、彼らの反対をはねのけて実行してきました」と揶揄した。ウィリアム＝バー『キッシンジャー「最高機密」会話録』p.224。

\*38 アメリカ合衆国はこれまで南北戦争、第二次世界大戦、ベトナム戦争、イラク戦争(第二次湾岸戦争)といった長期戦の最中であっても大統領選挙を実施している。

\*39 「アメリカの外交政策は、多少の紆余曲折はあっても概ね理想主義的、原則的外交である。特に中国に対しては伝統的な「門戸開放」「機会均等」「領土保全」を掲げ、常に日本を牽制していた。とりわけ自国の利益、なかでも安全保障に関わる問題の場合には、強硬な原則外交を展開するのがつねである」。須藤『ハル・ノートを書いた男—日米開戦外交と「雪」作戦』p.199。

\*40 ウィリアム＝バー『キッシンジャー「最高機密」会話録』p.121。

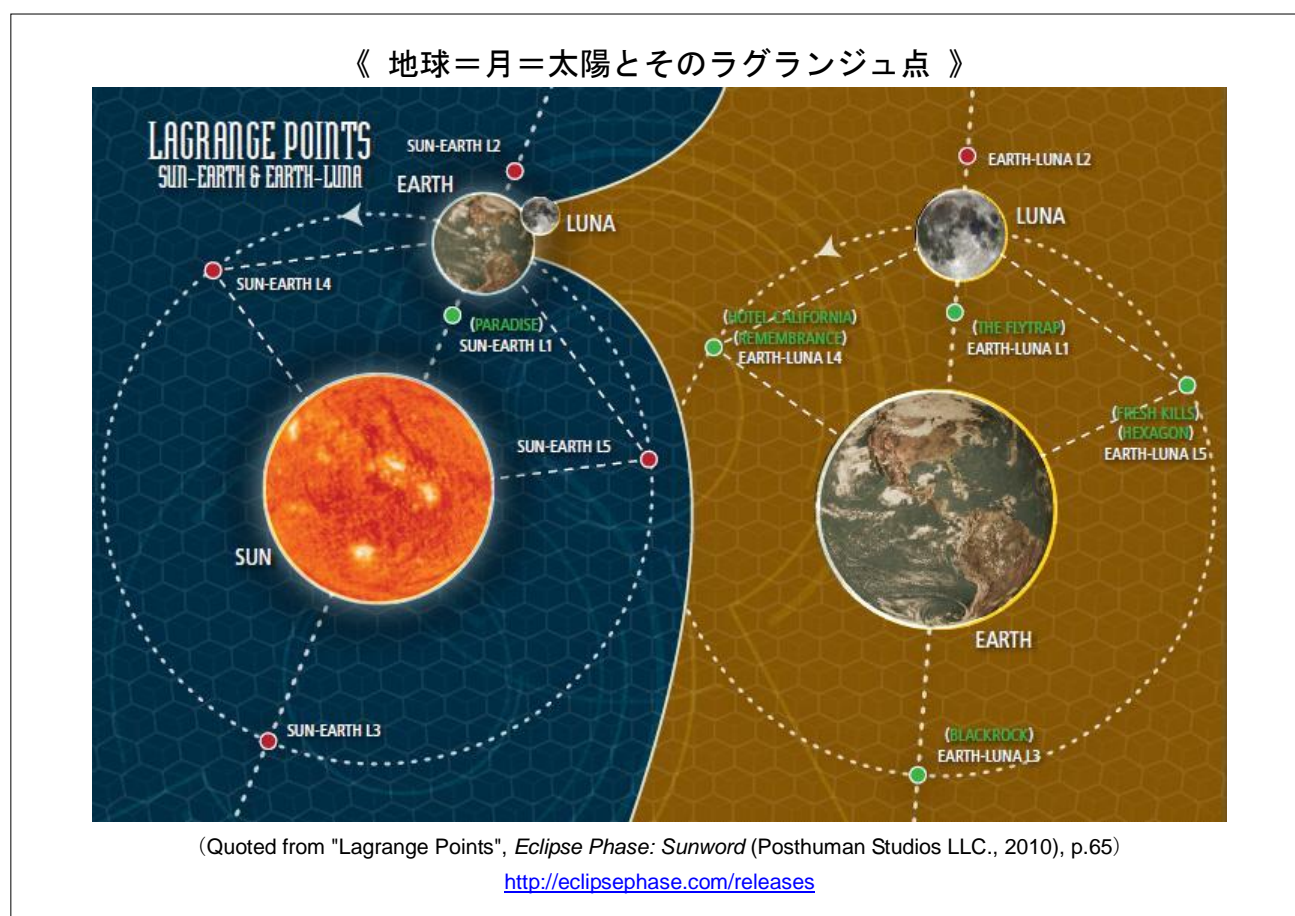


アリスター さて皆さんの寛大さに甘んじてこれまで説明を重ねましたが、もう時間はないのですから、ごく簡単にすませましょう。

(ひと息の間)

アリスター ケント氏が提案した「不朽の正義」作戦は、端的に言えば船団護衛の戦力を丸ごとラグランジュ点の奪還に転出させ、それで地球と月の間にあるL1の敵を撃破することで、地球への通商路を打通しようということだと理解できます。この積極性自体は、本官も肯定するところですが、しかし一点、どうしても賛成できかねます。原案では成功の見込みが乏しいことです。

(ケント、侮蔑の色を露にして反論する)



ケント まだダボラ言ってるよー、このバカ平民の田舎女！ この「不朽の正義」作戦計画はね、合衆国の、と・う・ご？（と一瞬うつろな目）エート、トウゴウ・サンボウ・ホンブ？（とうつろな目）がガンバってね、ハイパー電腦のね、ウーント、二〇〇回？（とまたうつろな目）そうそう、二〇〇回のシミュレーションで出てきたの。わかる？ 計画の成功率はね、エー（と目がうつろ）、九三．六％！（と数字を強調）二〇〇回で、九三．六％！ ボク様と合衆国の勝利はね、ちよースゴ！ ビンボー平民の女、マジ使えねー。ボク様、サイコー！、サイコー！！

アリスター 高等弁務官。まさにそれ故に、本官は勝ち目が薄いと申し上げざるを得ず、



ゆえに原案の改善を要請する次第なのです。

ケント あかね、コレ、そーいう話じゃないの。バカ女、も一黙ってな！ 平民のバカね、戦いとか知らないから、すぐ弱気になっちゃうんだね。でしょ、皆さん？ それにね、合衆国がね、エート、二〇〇年？……かけてつくった宇宙艦隊は……。

アリスター そこです。先ほどあなたは「ハイパー電脳」と言われた、そうですね？

ケント だから何？ ウザいよ、このクズ！

アリスター では質問です。今、この太陽系で、戦術に最も長けたハイパー電脳は何ですか？

ケント ホーラ、下らないバカ、またほざいてるよ。今さら質問なんかね……。

アリスター (ケントの話を遮り) ここにいる皆さんにも御訊ねします。今の太陽系で最優秀の戦術AIは何でしょうか？

(ニャン、挙手する)

アリスター どうぞ、ニャン特使。

ニャン特使 あなたはティターズのことを仰りたいのですか？ 彼らこそ最優秀の戦術AIだと？

アリスター そうです。

(議場、ざわめく。それが収まると、アリスターは話し出す)

アリスター 申し上げたいのはこういうことです。先ほど本官はティターズの思考パターンをこうまとめました。「三対一であれば攻撃し、一対一では防御し、一対三であれば撤退して別の戦域に向かう、その程度の判断力」と。ティターズはこの数週間、月や地球に対して威力偵察をくり返しており、こちら側の戦力は敵に丸わかりです。にも関わらず、敵は撤退も攻撃もしません。ティターズに戦略の駆け引きや自信過剰がないのは先ほど説明した通りです。ではなぜ彼らはラグランジュ点にいるのか？ どう思われますか、ニャン特使。

ニャン特使 先ほどのお説が正しいとすれば、それはティターズの戦力が地球側に比べて多すぎもせず、少なすぎもしない、ということになりますね。ティターズの判断力が信用できる、という前提に立てば、ですが。

アリスター まさにその通りです。おそらくティターズがL1に保持している戦力は、船団護衛部隊や防御人工衛星を含めた現在の地球が擁する戦力との比率では、三対一から一対一の間にあるのです。そしてラグランジュ点の引力均衡状態は、そこを占有する側にとって燃料消費の点で有利であるのは自明のことです。地球と月から引かれるバランスがちょうど良いのですから。対して攻める側は、余分に燃料を使わなければなりません。これは、高地に陣取る敵軍に対して急坂を上がって向かうのと同じでして、今の我が方が燃料供給に不自由である以上、はつきりいって不利です。少なくともティターズがそう判断しているのは行動から推測できます。そして本官はこの点に関し、ティターズに同意します。彼らこそ有史以来、最高の戦術AIだからです。違いますか、ケント高等弁務官。

(ケント、せせら笑いながら口を開く)



ケント 田舎のビンボー女って、バカのバカだね。バカ二乗だよ、ダブル・バーカー！ 変な話ばっか、バカだよ。ティターズなんてね、ただの狂ったキチピーAIなの。ステルスとかワケわかんね一兵器持ってるだけ。これ常識、ジョ・ウ・シ・キ！！ あのね、ダブル・バカの平民の女がダベくってる間、メッシュ見てたんだけどね（とうつろな目）、「すうばあ 2ch」にあった書き込み、これ、コレ！ 「ティターズ厨二病乙」「クソゲーAIのパクリww」。ほらほら、これ民意。わかる？ なにが「有史以来、最高の戦術AI」って、まじキモいバカだよ！ 田舎モンの平和ボケで、負け組の平民のダブルバーカー女、ほんと誠意ないし使えね！ バカがいると、バカうつっちゃうからさ、タイタンなんて負け組ビンボー国、も一死ぬ死ぬ！！ そう思うよね、皆さん!?

ハウエル エリートのに、ずいぶん温度高めだな、フツ。（と独り言して肩をすくめる）

アリスター 高等弁務官、あなたは自国のハイパー電脳を信頼しておいでです。しかしながら、その電脳はどれほどの成果を上げておいでですか？ 失礼ながら、合衆国軍は敗退の一途です。なぜか？ 皆さんにはおわかりでしょう。ティターズの戦術の才がずば抜けているからです。そしてティターズはアメリカ合衆国がまさに立脚する地球文明の産物です\*41。ではどう思われますか、皆さん？ 片やアメリカ一国のAI、片や太陽系の覇者となりつつある地球文明産のAI、どちらの方が優秀な戦術AIなのでしょうか？ どちらがいわゆる「勝ち組」のでしょうか？

エ大使 そりゃ姐さん、ティターズやろ。みーんな、そない思っとるや。

（議場、または静寂に支配される。アリスターは悠然として、ケントは顔を赤らめて周囲をにらむ）

ニャン特使 では大佐、そろそろ代案のご説明をしてくださいますか？

アリスター 了解です、特使。では本官の代案はこうです。ラグランジュ点の敵は脅威です。それは何人にも否定できません。純粹な守勢ではジリ貧であり、正面攻撃はドカ貧。ではどうするか。孫子曰く、「正を以って合し、奇を以って勝つ」と。通常的手段ではない第三の手段を取るのです。それが本官の提案です。

ニャン特使 第三の？ 通常的手段ではない？ そのようなものがあるのですか？

アリスター あります、ごく簡単な。

ニャン特使 何ですか？ それは。

アリスター こうです。本来の予定通りに連合船団が出るとすれば、地球から月に向かう間に必ずやL1の敵から横撃を受けるでしょう。これは間違いなく船団側にとって不利な戦闘であり、それをティターズは知っています。しかし彼らの単純さ、いいえ、マニア的マジメさは、それを敵が悟って裏をかく可能性を想定しません。ですから本官の提案はこうです。予定通りに船団を出航させ、敵の攻撃を甘んじて受け、そこで反撃するのです。事前にトリックを輸送船に仕掛けておいた上で。

ニャン特使 トリック？ 何ですか、それは？

アリスター 簡単です。一部の輸送船には避難民ではなく機雷を満載し、敵が接近した時点でそれを放出するのです。むろんIFF（敵味方識別装置）は切った上で。でない

\*41 じつはティターズが地球の某国（US）軍部の発明であることは、*Eclipse Phase Rulebook 3rd Edition*, p.354.



と彼らは我が方の識別信号を模倣して回避するでしょうから。この機雷の幕にまぎれて船団を月軌道に乗せ、そこから火星に、そう、はなから居住スペースに乏しい月ではなく、スイングバイ航法で火星へと送り込みます。その後、難民を降ろした輸送船をもって通商路の再開にあてるのです。それだけです。

(議場、一瞬しずまりかえるが、そこで喧騒が巻き起こる)

ケント 何言ってるんだよ、バカ！ そんなことしたら、味方の船だって……。

アリスター ええ、遺憾ながら巻き添えを食らう船が出てくるでしょう。しかし過去を振り返れば貴国アメリカもまた、二一世紀において「コラテラル・ダメージ」(付随損害、collateral damage) の概念を実施してみせたではありませんか、かつてイラクやアフガニスタンにおいて。ほら、皆さんご存知の諺にあるでしょう、「代価なくして成果なし」(No pay, no gain) と。ともあれ地球を脱出する以上、この程度のリスクを甘受しないで難局は乗り切れないかと。ケント高等弁務官ほどの勇敢なお方が、まさか否とは言われませぬ。以上が代案です。

ケント この愚民め、ボク様をリスペクトしろよ……！

アリスター 皆さん。(と聴衆の方に向く) ティターズは戦術に長け、戦場では冷静に行動します。この強敵に対して血気盛んに特攻したり固定的な防衛で対抗するのは、彼らの得意科目で競うということです。今まさに人類側はバラバラに頑強な抵抗を示し、個別に拠点を守っています。それは外部から閉ざされたゲームステージがモザイク的に点在している状況です。これこそ戦術AIの、すなわちマニア的知性の思うつぼでしょう。彼らはそういう閉じた戦場に最適化されている上、現在のティターズは曲りなりに太陽系全体を版図としているのですから。

エ大使 やけどなあ、姐さん。それやったら、どないせえちゅうのかね。今のわいらもスクラム組んで戦っとる。これでも精一杯な。ほんでも負けとるんは確かなんやが。戦いの有り様、そう、姐さんのいう戦略変えた方がええのやろな。せやけどな、どない変えろちゅうのかな、今さら？

アリスター 大使。難しいことは何も無いのです。ただ人類側が互いに助け合い、譲り合うだけで、戦局は好転するのです。

エ大使 ホンマでっか？？

アリスター そうです。これは観念論ではなく、歴史研究の戦訓です。これまで世界大戦において勝者となった陣営は、互いに助け合い、資源を融通しあいながら、一步一步勝利に近づいていきました。これを省みるなら、人類の各勢力が互いに戦力を送って支援し、資源を融通しあい、互いに難民を迎え入れるだけで、状況は一変するはずで。地球や月といった単一の戦域にこだわりすぎる争いは、かつてのミッドウェー海戦、スターリングラードの戦いで枢軸国側が喫したような惨敗となりかねません。そうでなく、著しく劣勢であれば潔く撤退し、敵の大兵力には決戦でなく持久戦で対応し、そして敵手にある発電所や資源セクターを、いいですか、過度にこだわることなく打撃し、できれば価値ある物がかっさり、少し



づつ相手を消耗させるのです。これは「消耗戦略」と呼ばれています\*42。

ニャン特使 そんなことが可能なのですか？ そんな戦略の実例があるのですか？

アリスター あります。非常に有名な事例が。

ニャン特使 何ですか、それは？

アリスター アメリカ合衆国の独立戦争です。戦略を学ぶ者にとっての模範です。

(みな、一斉にケントを見る。ケント、そっぽを向って、かすかにあごをしゃくる。会議場の端にいた数名、出ていく)

アリスター 皆さん、思い出してください。植民地アメリカは、宗主国イギリスに対して独力で性急な決戦をしかけて勝ったのではありません。ワシントン将軍と大陸会議は、はなから実力ではイギリス帝国にかなわないと承知の上で、まずは守りに徹して持久し、時間と資源を稼ぎました。そうして自前の兵力を養い、フランスを同盟国として味方につけ、ついにヨークタウンでの決戦でイギリス陸軍の主力を降伏させたのです。ですがもし彼らが闇雲に勝負を急いだなら、結果はどうなっていたでしょうか？ この偉大な戦訓をお考えいただきたいのです\*43。

エ大使 なあ、その戦訓で、なんか参考本がやったりしやんかな？

アリスター ええ、二〇世紀に生きたバーバラ＝タックマンという戦略研究家の。彼女が書いた『愚行の世界史』には迫力ありますよ。もう一つ、ポール＝ケネディの『大国の興亡』がお手ごろです。URLは後で書きましょう\*44。

エ大使 ふーん、そないな本やったのか。エライヤツら、おったもんやなあ。

(議場の喧騒、ゆっくりと静かになっていく。アリスター、思わずケントを背にし、皆に手をさし伸べて語りかける。ケント、内ポケットに右手を入れて何かをつかむ仕草。ニャン、懐に手を入れてまさぐった後、何か小物を机の上に置く)

アリスター いいですか、皆さん。消耗戦略に即効性はありません。戦術で勝とうとするのではなく戦略で、そうですね、上半期、下半期といった短いスパンでなく、五年十年といったスパンでの戦い方に切り替えるのです。星一つ一つに捉われるのではなく、太陽系全体を人類の防衛線だと発想を切り替えるのです。敵の大兵力を撃滅するのではなく、敵の大兵力を維持する経済力を削るのです。孫子曰く、「攻めるはすなわち足らず、守るはすなわち余りあり」と。相手にはこちらの強力な拠点を攻めさせエネルギーを消耗させ、こちらは相手の弱い拠点を無理せず侵食してエネルギーを掠め取るのです。敵の戦法は非情な弱肉強食ですが、人類は助け合いによる囲い込みをモットーとするのです。そうなれば、ティターンズが大軍勢であればあるほど、エネルギー不足に陥って動けなくなるでしょう。人類は助け合いに立脚する同盟という善意の大海を太陽系に構築することで、ティターンズという悪意のマニア的暴力を溺死させてしまうのです。

\*42 「消耗戦略」「殲滅戦略」の両概念については、ハンス＝デルブリュック、小堤盾編訳『戦略論大系 デルブリュック』芙蓉書房出版、2008年の「政治史的枠組みの中における戦争術の歴史」pp.17-18を参照。

\*43 この先例について考えた人物の一人は、1973年10月25日にキッシンジャーと会談した黄鎮（当時の中華人民共和国連絡事務所長）。黄曰く、「私自身も軍人として、兵器がすべてを解決するなどとは思っていません。もし兵器のほうが決定的な意味をもつというのなら、中国革命は決して成功しなかったことになるからです。ジョージ・ワシントンも決して勝利をおさめられなかったでしょう」。ウィリアム＝バー『キッシンジャー「最高機密」会話録』p.199。

\*44 『愚行の世界史』<http://www.amazon.co.jp/dp/4122052459>、『大国の興亡』<http://www.amazon.co.jp/dp/4794204914>



エ大使 それやったら、さては連中を囲いに入れて干上がるのを見物、ちゅう魂胆だな。悪趣味やな、姐さん。こりゃあ、ティターズのトンマ野郎、はよ保護しやんって絶滅やど。なんかアイツら可哀想になってきよった。やれか水槽やなんか用意しておらへんかな？

(議場の列席者、笑い出す。ケントとニャンのみ笑わず)

エ大使 こないな景気ええ話、耳にするの久しぶりや。それで、姐さん、その先は？

アリスター 失礼、ええと、話はどこまで……。 (と彼女の立体映像が乱れながら、笑いかけて)

エ大使 たしか、ティターズを溺れさせる、ちゅうとこまでやった。

アリスター そうでした、ありがとうございます。さてその具体的な方針は、時間もないことですので、別の機会に改めて論じましょう。とはいえ本官の提唱は、すでに申し上げましたようにアメリカ独立戦争における植民地側の持久戦法、ないしはアメリカ南北戦争で合衆国が採用した「アナコンダ作戦」と同じです。奇抜さは何らありません。いま決戦戦略に転じるのは無益だと主張するのはそういうことであり、ワシントン将軍、リンカーン大統領といった偉大な戦略指導者を見習って戦おう、ということなのです。くり返しますが、さすがに戦術で出し抜けるほどティターズは甘くありません。だからこそ社会の一人一人が手を取り合って、この総力戦を勝ち抜こうではありませんか。誰その国をリーダーとするのでなく、支配や征服のための戦いではなく、全ての国家が助け合って団結し、富と情報とを再分配し、福祉世界を建設しながら戦いましょう。人類の、いいえ、全知的生命体の恒久的幸福のための戦い。それこそ明日を切り開く政治なのです。それこそアメリカ合衆国を始めとする連合陣営が国際連合を設立した本来の目的。そうではありませんでしたか、皆さん？



(Quoted from "Mercurial Investigator," *Eclipse Phase Rulebook 3rd Edition* (Posthuman Studios LLC., 2011), p.163) <http://eclipsephase.com/releases>

(ケント、内ポケットから拳銃を取り出す。アリスター、ケントを背にして気づかない。一部の者、気づいてざわめく)

アリスター なお、本官の作戦案について言えば、火星までの航海ですが、最低一ヶ月は要するとして、その間の燃料、酸素、水などの補給に関して腹案があります。非常時なので、発想を逆転させ、高速輸送艦ならびに戦闘艦を火星に先行させて船団との間をピストン輸送させるのです。会議の直前、本官は自艦のコンピュータに計算させました。結果はご希望あれば提出……。

(ケントの拳銃、何発も火を吹き、アリスターの足元にある金属球に命中。アリスターの映像は乱れて消え、球はスクラップとなる。議場にかついでロボットが続々と入ってくる)



ケント 田舎の平民フゼーがさ、ワケわかんねームダ話で、みんなのジャマになったの、見たよね。これテロ行為、テ・ロ、テ・ロ！！民意だからさ、ボク様の力で退場させたよ。ボク様、サイコー！サイコー！！\*45

ハウエル (驚いて立ち上がり) どういうことですか、これは。弁舌をもって争うべき会議場で発砲とは！国連始まって以来、発言者が暴力によって脅されるなど、いまだあってはならぬはず。事務総長、これは重大な違法行為であり、国際平和に対する侵害に他なりませんぞ！

ケント おい、警備ポッド。そいつ逮捕しな。(とハウエルを指差す) 容疑は、エート(とうつろな目)……そうだなあ、アメリカ合衆国と人類への反逆罪。死刑、シ・ケ・イ！

ハウエル なんと！ウィーン条約を忘れたのか\*46。(ロボットに取り押さえられる) おい、何のまねだ。わしには外交特権がある。一国の代表を毀損する行為は宣戦布告に匹敵するぞ！

ケント 連れてけ。

ハウエル 離せ、わしは囚人ではない。国際法の重大違反だ！何の権利あって……。 (とロボットと共に退出)

ケント 優勝劣敗ってことわざ、知らないの？\*47 ボク様に逆らうビンボー国、もーイラネ(と軽い口調で片手を振る)

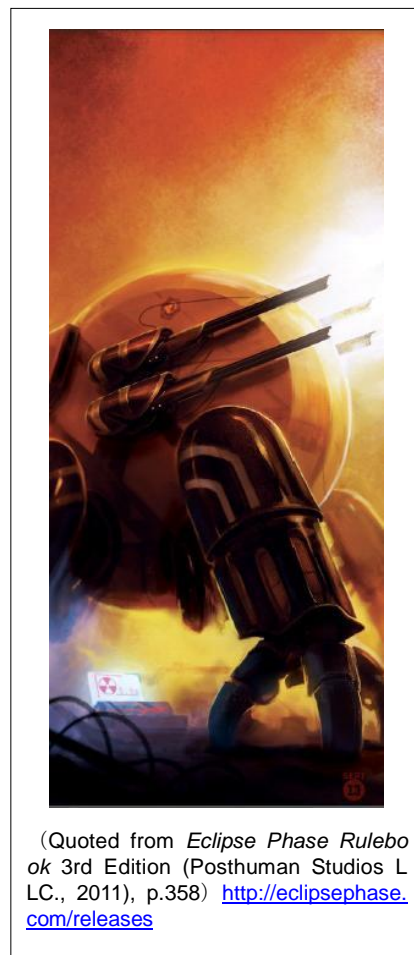
国連事務総長 ア、ア、せ、静粛に、静粛……。 (としどろもどろ)

(議場の喧騒、さらに高まる)

ケント 黙りなよ、みんな。これ、命令。

(ロボット、出席者一同に向かって前進。議場、たちまち静まる)

ケント これで閉会。でさ、もうちょっと言っとくよ。ワケ分からない絵空事で時間つぶすの、これで終わり！これからさ、ボク様がさ、いよいよ戦うわけよ。ボク様がさー、やっぱ一番エライんだから、これで勝ちだよ。そーしたらさ、ウザい抵抗勢力とか愚民とか、ティターンズ込みコみでやっつけてさ、太陽系丸ごと、全部ボク様のにしちゃうよ。どうよ、この戦略、ちょーカンペキだよ。それ



(Quoted from *Eclipse Phase Rulebook 3rd Edition* (Posthuman Studios L LC., 2011), p.358) <http://eclipsephase.com/releases>

\*45 暴力と脅迫によって公共の場での他者の言説を封じる政治手法は、近現代日本だけでも 5・15 事件、2・26 事件、1940 年衆議院での斎藤隆夫「反軍演説」と斎藤の除名処分問題、1960 年の浅沼稻次郎(社会党中央執行委員長) 殺害事件など、多数の事例が数えられる。アメリカの「グアンタナモ収容所」、旧ソ連の「スターリニズム」は言うまでもない。

\*46 正式には「外交関係に関するウィーン条約」(Vienna Convention on Diplomatic Relations) 及び「領事関係に関するウィーン条約」(Vienna Convention on Consular Relations)。20 世紀に締結された両条約を通じて、一国の外交団員は他国の権力から不可侵であると国際法的に認められている。

\*47 いわゆる「優勝劣敗」は、日本においては明治 15 年の加藤弘之「人権新説」中で明らかにされた寡頭政治思想のフレーズである。その骨子である、19 世紀欧米で生まれた「社会ダーウィニズム」は、「天賦人権」説(「基本的人権」概念の原点)を否定して特権階級による専制支配を正当化し、20 世紀のナチズムに継承されることになる。



じゃあさ、ボク様の青い地球さ、これから宇宙の真ん中にしていこうじゃない。  
で負け組連中とか平民、みんな殺しちやってさー、ほら、ボク様の大勝利！！ 宇宙最強の地球、バンザーイ！ ハイ地球！！（と片手を挙げ）

**議場の面々** ハイ地球！ ハイ地球！ ハイ地球！（と起立して片手を挙げ、連呼する）

**ニャン特使** ああ、地球の皆様。なんとたくましい、なんと頼もしいのでしょうか。私、つい  
うっかりタイタン人の口車に乗ってしまうところでした。もう迷いません。私ども  
木星圏は一致団結、宗主地球を守るため、ささやかながら義勇軍を組織したいので  
すけれど、憎むべきAI・ティターズをやっつけるWMDを始めとして至急の  
軍備増強、ぜひ国連と地球の皆様にご許可いただきとうございます。どうか木星を  
偉大なる地球の皆様と共に戦わせていただけませんか？

**ケント** アンタねー、言うの遅いよ、木星女！ ま、いいんじゃないネ？

**ニャン特使** 私ども木星の案をお認めいただき、ありがとうございます、ケント様！ ありがと  
うございます、総長！（と総長に抱きつく）ああ地球よ、永遠なれ！

**国連事務総長** ウ、ウム、よかったよかった。（としきりにうなづく）

**ケント** じゃあ宴会場へ、レッツ・ゴー！！ あー腹へったわ。（と演壇から下りる）

（ケント、議場の出口に向かう。他の面々も席から立ち上がり始める）

**F 国代表** だがこれで良いのか？ タイタンが黙って引き下がるとは……。 （と小声で）

**C 国代表** おいおい、あれはアメリカの仕業さ。俺達は関知してない、だろ？ （と小声で）

**J 国代表** そうそう。ケントの馬鹿がメチャクチャやりたきゃ、しばらくやらせればいい  
のよ。あの国が息切れしたら、あやし達のチャンスってこと。（と小声で）

**F 国代表** うーん、それで外世界の連中が納得すればいいのだが……。 （と口ごもる）

（ケント、議場より足早に立ち去る。議場の面々、続々と退出。エクストロピア大使、席に座ったまま。そこにアメリカ大使がゆっくり近づく）

**エ大使** ヤナタの国の勝利や、めでたいな、ハ！（とおおげさに拍手する）

**アメリカ大使** かもしれん。だが内部抗争は社会全体の敗北だよ。終わりの始まりさ。

**エ大使** ホンマにそない思っとったら、なんで止めなかったんや？

**アメリカ大使** 本職にケントが止められるなら、そうしていたとも。だがケントと我が国の  
タカ派はいささか大きくなりすぎた。そのバックにいるハイパーコープ勢力もだ。  
彼らは戦争を望んでいる。彼ら自身が主導する戦争を\*48。

**エ大使** 他人事な言い方やな。学者風の批評はもうええわ。で本音は？

**アメリカ大使** そちらは、ある亡命者とその家族を受け入れるかね？ その人物とはハイパ  
ーコープの内情に詳しく、外交に熟達した駐国連アメリカ大使だ。

**エ大使** 船が沈没するつちゅう時には、真っ先にネズミが逃げ出すチュウわけか。

**アメリカ大使** 国には十分尽くした。あとは家族と一緒に暮らしたい。せめて最期の一時まで。

\*48 現代アメリカ政治における政策決定のプロセスとその背景については、コリン・S・グレイ、大槻佑子訳「核時代の戦略—アメリカ（一九四五～一九九一年）」ウィリアムソン・マーレー、マクレガー・ノックス共編、歴史と戦争研究会訳、石津朋之、永末聡監修『戦略の形成（下）—支配者、国家、戦争』（中央公論新社、2007年）。



エ大使 木星に逃げればエエやろ。自分の国の高官も大勢逃げとるんやろ\*49。  
アメリカ大使 そして国を滅ぼした馬鹿セレブの指図をまた受けろと？ 勘弁してくれ。  
エ大使 ……ま、考えておこう。  
アメリカ大使 感謝する。(と頭を下げ) 明日、改めて連絡しよう。(と言って去っていく)

(アメリカ大使、退出。と次に、ニャンが引き返してくる。あとには彼女とエクストロピア大使だけ残る)

ニャン特使 お疲れのご様子ですね、大使。何か飲み物をお持ちしましょうか？  
エ大使 やなたは行かへんのか、モレリアはんよ。  
ニャン特使 どこにですか？  
エ大使 宴会とやらに。  
ニャン特使 あなたこそ？  
エ大使 行く気するか？ あないなの見て。  
ニャン特使 地球の御歴々は行かれましたのに？  
エ大使 ケッ、あないなトンマのナルシストなんか、メシー一緒に食えるか!？  
ニャン特使 そんなことでは御国の立場をお悪くするかもしれませんよ。  
エ大使 ドーセ連中にしてみりゃ、小惑星のわいらは石コロ以下や。胸糞悪いわ！  
ニャン特使 それなら、どうなされるのですか。地球人に逆らうと今は損ですのに。  
エ大使 やなた、わいに何をせえちゅうのや？  
ニャン特使 この戦争、長引くでしょうね。そしていずれ双方とも資源が枯渇する。  
エ大使 今さら何を言うてんや？  
ニャン特使 アリスター大佐が言っていたでしよう。ティターズは「有史以来、最高の戦術 A I」ですって。それからイナゴ、荒野、マニア的暴力、でしたわね。  
エ大使 やからどないしたって？  
ニャン特使 国連や合衆国もまた戦術 A I に頼って戦争を指導していますわね。  
エ大使 それで何や？  
ニャン特使 あら、お分かりにならない？ 木星は天然のヘリウム・タンクですよ。それにいよいよ木星圏は強力な自警団を編成できる権限を得たのです。親愛なる地球の皆様の軍隊に匹敵するほどの、ね。しかも先ほど A I 退治用の WMD の生産と保有を事務総長じきじきにご認可いただきましたし。ねえ、あなたもお聞きでしょう。WMD、そう、大量破壊兵器 (Weapons of Mass Destruction)、核兵器やらナノテク兵器。ほら、言質はち



(Quoted from "Catching Its Tail PIA12826." Astronomy Picture of the Day. Retrieved Dec.23, 2010 (Credit: CICLOPS, JPL, ESA, NASA) ([http://s3.amazonaws.com/ciclops\\_ir\\_2011/6738\\_16274\\_1.jpg?AWSAccessKeyId=14V1KFXK26R9EA1V0Q02&Expires=1328723350&Signature=jB%2B2KJPmXoQfWf221wkLg3NLDLs%3D](http://s3.amazonaws.com/ciclops_ir_2011/6738_16274_1.jpg?AWSAccessKeyId=14V1KFXK26R9EA1V0Q02&Expires=1328723350&Signature=jB%2B2KJPmXoQfWf221wkLg3NLDLs%3D)))

\*49 木星に逃亡した合衆国の政治家たちの末路については、"THE FOUNDING OF THE REPUBLIC", *Rimward*, pp.33-34.



やーんとここに、ウフフ……。 (とほくそ笑み、先ほど机の上に置いた小物を取り上げて示す。三六〇度撮影可能な小型ビデオカメラ)

エ大使 ……ケツ、大した交渉人<sup>こうしょうじん</sup>やな、自分は。

ニャン特使 いいえ、まさに大国の興亡<sup>たいこく こうぼう</sup>を見物<sup>けんぶつ</sup>しているだけです。せいぜい合衆国とティターンズには互いに切磋琢磨<sup>せつそくたくま</sup>してもらいましょうよ。磨耗<sup>まもう</sup>しきるまで。

(エクストロピア大使、議場より立ち去ろうと。ニャン、一人つぶやく)

ニャン特使 矛盾<sup>むじゆん</sup>ですね、これは。(と誰ともなく言う)

エ大使 はあ？ (と振返る)

ニャン特使 人類<sup>がよく</sup>は我欲<sup>がよく</sup>にかられて中途半端<sup>ちゆうとはんぱ</sup>な知性<sup>ちせい</sup>を創造<sup>そうぞう</sup>しました。その知性を倒すために別の知性を創造する。その次は？

エ大使 チビが親に逆らうんは、どこの家庭<sup>かてい</sup>やけどようやることや。

ニャン特使 この絶滅戦争<sup>ぜつめつせんそう</sup>は青年の反抗期<sup>はんこうき</sup>とはわけが違いますよ。そもそも身の丈に合わないテクノロジーに頼りすぎる人の心の幼<sup>おきな</sup>さに原因<sup>げんいん</sup>があったのかもしれませんが。

エ大使 やからって行って、モレリアはん、宇宙時代の今になって電腦やら核融合を廢絶<sup>はいぜつ</sup>やるわけにもいかん。

ニャン特使 規制<sup>きせい</sup>はできるはずです。人類が技術に見合った道徳的資質<sup>どうとくてきししつ</sup>を獲得する時まで。

エ大使 そりゃ極論<sup>きよくろん</sup>や。それや鎖国<sup>さこく</sup>っちゅうこっちゃがな。引きこもりや。

ニャン特使 私どものガスジャイアント資源はそれを可能としますわ。ところで、もし木星がその道を選んだとして、御国<sup>おくに</sup>はどうされます？ 共に歩むのであれば互いに利益<sup>りえき</sup>を得ることもあるでしょうね。相互不可侵<sup>さうごふかしん</sup>、エネルギー資源の供給<sup>しげん</sup>などなど。

エ大使 本音<sup>ほんね</sup>を言うたらどや。わいらの兵器・造船業<sup>ぞうせんぎょう</sup>がお目当てなんやろ。おたくも他の国も、わいらの GDS のお得意先<sup>とくいさき</sup>やからな。(と鼻で笑い)

ニャン特使 あら、身も蓋<sup>みふた</sup>もない。好意<sup>こうい</sup>で申し上げたのに、フフ……。 (と密やかに笑い)

エ大使 わいらはな、古典資本主義<sup>こてんしほんしゆぎ</sup> (Anarcho-capitalism) ともボチボチ、無政府主義ともボチボチ、これが国是<sup>こくぜい</sup>の出入り自由なベンチャー国家<sup>ベンチャーこく</sup>なんや\*50。宇宙に背え向けるって、ちびつとばかり、やり過ぎや。

ニャン特使 なのに、地球系ハイパーコープ主体<sup>しゅたい</sup>の国連<sup>れんけい</sup>と連携<sup>れんけい</sup>するのはそろそろ潮時<sup>しおどき</sup>、とっておいでのおくせに。今こそ外世界<sup>がいせかい</sup>が一丸<sup>いちがん</sup>になって、地球の圧政<sup>あつせい</sup>から離脱<sup>りだつ</sup>するチャンスですよ。

エ大使 まあな。やけど同じ手え組むっちゅうのやったら、もう一つ国<sup>こく</sup>がやる。でっかいガスジャイアント持っとるトコロがもう一つな。

ニャン特使 良いお返事、お待ちしております。

(ニャン、立ち上がって一人歩き出す。エクストロピア大使、その背中に向かって言う)

エ大使 なあ、モレリアはんや。自分、この顛末<sup>てんまつ</sup>、はなっから狙<sup>ねら</sup>ったな。やかっしたな。タイタンは国連から完全に追い出された。木星は晴れて核保有国<sup>かくほゆうこく</sup>や。いよいよ独立<sup>どくりつ</sup>かな。そのうち火星<sup>せいしん</sup>に攻め入<sup>い</sup>るのかな。第二のアメちゃん合衆国<sup>あつせい</sup>や。や

\*50 EP Rulebook 3<sup>rd</sup> Edition, p.78.



けどな、自分に忠告やると。木星ってタイタンと昔っから仲が悪かった。せやけど水素やヘリウムの輸出競争でケンカしとったんはともかく、これは行き過ぎや。結局はお隣同士、同じ人類やへんのか。やってで後悔やると。

**ニャン特使** (上半身だけ振り返って) ねえ、ご存知ですか？ アフリカ大陸は人類発祥の地だったんですって。本当なんでしょう？

**エ大使** 学者どもはそない言うておるらしいな。

**ニャン特使** ええ、言うだけなら誰でもできますね。でも先進国の学者や平和を愛する道徳家が、人類発祥のアフリカをどれだけ気にかきましたか？ 豊かな彼らが暮らしたのは快適なリゾート地。澄みきった空気、青々とした木々、清潔で安全な住宅街、神々しいショッピングモール。うってかわって私のアフリカは？ 工場からのチリで空はうす汚れ、木々は先進国の企業に伐採され、町並みといえ、先進国のお台所から運ばれてきた産業廃棄物のゴミ山ですよ。臭くて臭くて、ハエが真っ黒にたかる不潔なスラム街。ねえ、先進国のご立派な勝ち組が一体いつ、同じ地球にあったゴミ山暮らしの住民を、同じ人類として扱ってくれました？ 私の母はね、ゴミの中で死んだんですよ、負け組としてね。

**エ大使** なあ、自分の気持ちはわかるがな、やけど恨みつらみて、乱暴な仕返しで晴らしても、別の恨みをどこぞで買うもんや。

**ニャン特使** いいえ、これは感情論でなくビジネスの教訓ですよ。ところがですね、アフリカにだって栄光の時代があったんですって。中世の頃は黄金を産出して、世界経済の中心で、イスラーム文化の影響を受けて大学まであったとか。黄金の都トンプクトゥ、地名はお聞きでしょ？ ヨーロッパの白人が魔女狩りパーティで人間をバーベキューしていた頃ですよ。やがて白人がバーベキューに飽きて平和なアフリカにやってくると、武力で蹂躪して黒人を奴隷にしたんですね。トンプクトゥはそうやって富を奪われて、ヨーロッパ人に征服される時分には、とっくに荒廃していたんですって。私のこの黒い皮膚にだって、黒人娘をレイプした白人のDNAが混じってるんでしょう。ケントみたいなケダモノの遺伝子が。ほおら、力さえあれば何だってできるし許される。勝てば何でも許される。ね、違いますか、大使？ (と微笑みかける)

**エ大使** おうおう、ビジネスで、結局は信用第一や。力で無理押しやるハゲタカは、いづれみーんなの信用失って、いつの間にか消えてなおす。自分は若いな。ハゲタカの末路、見いかってへんのかな？

**ニャン特使** あら、そちらこそ営業の哲学、お忘れですか？ 「砂漠で砂を売りつけ、シベリアで氷を売りつける、これぞ真の営業」。でしょう？ それにですね、生命進化の歴史、思い返してごらんなさいな。

**エ大使** はあ？ 進化がなんやな？

**ニャン特使** まあ、よくご存知のくせに、オトボケになって、フフフ……生き物は地球の誕生以来、憎み合い、騙し合い、奪い合ってきました。そのうち他の生物を滅ぼして地球の支配者になったのが、ほうら、今の人類、今の私たち。競争の中でわたし達アフリカ人は一方的に搾取され、バカにされて救済される負け組



に分類されましたよ\*51。ねえ、お気をつけくださいな。小惑星の御国だって、このままですとアフリカの二の舞。どうです、お分かりでしょう？ 弱肉強食、殺すか殺されるか、それこそビジネスの王道、宇宙の摂理。さあ、御国とアフリカ人とで、弱った連中を今こそ搾取し返して、つかの間の平和と一緒にエンジョイしましょうよ。(と笑う) 私のロジック、なにか間違ってます？

**エ大使** (しばらく押し黙り) ……大昔は自分の言う通りやった。今のわいらもさよかもしれん。せやけど未来までその通りやったら、人類おしまいや。共食いやぞ。

**ニャン特使** まあ、大使！ 私たちの収益さえ保障されるなら、人類なんて絶滅したってかまわないじゃありませんか。生き残る私たちこそ新人類 (Tranhuman)、でしよう？ (と笑う) ……ではご機嫌よう、大使。(と半身で会釈し、議事場より退出)

(エクストロピア大使、一人議事場に残る。円卓中央の壊れた金属球に歩み寄り、軽く触れて退出。議事場は無人となる)

——幕——

---

\*51 近代ヨーロッパの「勃興する産業資本主義」と「アフリカを蔑視し、未開・野蛮視する知の枠組み」とのタイアップで生まれた 19 世紀～21 世紀現在の「アフリカ・スキーマ」(アフリカを一方向的に理解するための知識のセットであり、その根幹はアフリカ人とその社会の否定)については、『興亡の世界史第 20 巻 人類はどこへ行くのか』pp.268-279.